

---

# 方向音痴少女は今日も行く！

学校嫌い

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

方向音痴少女は今日も行く！

### 【Zコード】

Z5346Z

### 【作者名】

学校嫌い

### 【あらすじ】

極度の方向音痴を持ち、また極度に可愛いものが好きな少女、百<sup>ひゃく</sup>りかわきく合河菊。そんな少女が高校生になつたら、果たしてどうなるのでしょうか？これは、そんな彼女の日常のお話です。

## 方向音痴少女の朝

カーテンの隙間から差し込んできた陽光で目を覚まし、暫く天井を眺めて体を起こす。両手を組んで体をグッと伸ばすと、なんとも言えない快感を感じる。私はこの感覺が好きだ。

布団を捲つてベッドから降り、鏡の前に立つてビニールもおかしな所がないか確認をする。

「よし、問題なし」

伸ばした黒い髪も、ビニールも跳ねていないし、目の下にも隈は無いし、肌も荒れていない。

水色の布地に猫の柄がプリントされたパジャマを脱いで、ベッドに置き今日から通うことになる高校の制服を取り、袖を通す。ブレザーが多くなった最近にしては珍しく、セーラー服だ。

襟の部分が水色で、白いラインが入っており、一年生である」とを示す赤いリボンを結ぶ。襟と同じく水色のスカートを履いて、また鏡の前に立つてチェックする。

「うん。大丈夫」

今日から私は高校生だ！

「おはよう、母さん」

「おはよう、菊。制服、よく似合つてゐるわね？」

「ありがとう。父さんもおはよう」

下に降りて、台所に入り百合河<sup>ゆりかわ</sup>桜<sup>さくら</sup>、私の母さんと百合河<sup>ゆりかわ</sup>修輔<sup>しゅうすけ</sup>、父

さんに挨拶をする。

母さんは、今年で三十八歳になるなど見た田せどりもやつは見えない。何せ身長が百五十一センチしか無いのだから、無理もないけど。

そんな母さんを見ていると、偶に父さんはロリコンだつたんじゃないかと思つことがある。成長して、母さんの身長を追い越したからもう思つよくなつたのかも知れないけど。

私の身長は百六十五センチ。

母さんは十三センチの差がある。抱えてと言われたら、私でも難なく抱えることができる母さん。父さんが、病氣で死んでしまつてからは、女手一つで育ててくれた母さん。

今私のできるのは、少しでも母さんの負担を減らすことだけ。

「母さん、後は私がやるから座つて？」

「いいのよ。菊こそ、まだ寝て無くていいの？」

でも、母さんはいつも家事は譲つてくれない。今まで、面倒を見てくれたからその恩返しがしたいのにな……まあ、料理の腕は致命的だけど。

「うん。最初の田位は早起きしよつと思つて」

「そんなこと言つて……たまたま早く田が覚めただけでしょ？」

「う……」

流石、十六年間一番近くで見てきただけある。

トントントン、と母さんは包丁を軽快に動かす。悲しいことに、この料理スキルは私に遺伝せず、父さんの料理が苦手な所が遺伝したらしい。

「修くんの形見みたいな物よね」

母さんは、偶に心を読んでいるかの様な発言をする。例えば、今  
の様に。以前、理由を聞いてみると、何となく表情なんかで分かる  
らしい。

「そうだね……」

母さんは父さんを、修くんと呼び父さんも母さんを桜と呼んでい  
た。誰の目から見ても、一人は仲の良い夫婦で、娘である私から見  
てもそうだった。

学生時代の時の話を聞くと、高校一年生の夏頃に父さんから告白  
して、つき合いか始めた様で、最初こそは初々しいカッフルとして、  
クラスメイトどころか先生達からも温かい目で見られていたらしい。  
それほど二人はお似合いだったみたいだ。

そして、お互いのことを知つていった。

結婚するまでもしてからも、喧嘩を一度しかしていないと言つんだ  
だからす”こと思つ。

「まあ、その一度の喧嘩がす”く長引いたんだけどね」

また心を読まれた。

「わかりやすいのよ、菊は。そういう所はわたし譲りかも知れない  
わね。や、『はんできたわよ』

いつの間にかお皿に移されていたベーコンエッグを、テーブルに  
運んで席に着く。母さんは父さんの遺影に手を合わせてから席に着  
いた。

手を合わせて、いただきますと言つて味噌汁を少し冷まして一口  
飲む。

「相変わらず美味しい」

「ありがとう。それより、学校までちゃんと通り着けるの？ 中学校まではバスがあったから良かったけど……」

「…………ダイジョウブダヨ」

壊れたブリキの人形よろしく首をギ、ギ、ギと動かして言ひ。

「不安だわ」

そう、私は極度の方向音痴なのだ。さすがに右と左は分かるけど、実際に右に行けと言われたら左へ行ってしまう程の。

それに、

「それに、途中で猫なんて見かけたら」

それこそ本格的に迷子になってしまつ。

方向音痴と同じ、もしくはそれ以上に可愛い物が好きで途中で見かけたら何も考えずにその後を追つてしまい、結果道が分からなくなる。御陰で何度も近隣の人や商店街の人が総動員で私を捜すことになつてしまふ始末。

「一番遠い時は、隣町まで行つてたものね 一二駅分もあるのに」

母さんの言う通りで、中学一年生のある日の帰り道、とても可愛い猫を見かけてフラフラーと追いかけていつて、気が付いたら隣町まで行つていた。

偶然通りかかった晴がいなかつたら、きっと三田は帰ることができなかつたと思う。

「何度も確認したし、この辺は余り猫とかも通らないから大丈夫だつて」

「二十回中十八回も迷ったのこ？」

「ア、アハハ……」

じと皿で見てくる母さんの視線に耐えきれず、私は皿を反らした。

「じはんを食べ終わって、食器を洗い父さんに行つてしまふと言つてから母さんと一緒に玄関へ向かい、

真新しいローファーを履いて、母さんに向き直る。

「行つてきます」

「行つてらつしゃい。気を付けるのよ~。」

「うそ」

そう返事をして、家を出て空を見上げると、太陽が燐々と輝いていた。

深呼吸して学校がある左の方へ進み始める。道路の掃除をしていく所のおばさんに挨拶をして、暫く進んでいくと、

「ニヤ~」

と鳴き声が聞こえて、それを見た瞬間に黒い小さな猫がいた。

「はあ~……猫ちゃん、おいで?」

チチチ、と舌を鳴らしながらがみ込み猫ちゃんに手を伸ばすと、ゆっくりと近づいてきた。そして、私の指をペロペロと舐めてくる。

(はあ～……びひして小動物つてこんなに可愛いんだひひへ。)

可愛いのに思えていいと、猫ちゃんが足にすり寄ってきた。驚かせないよにひくつと前足の付け根部分に手を入れて抱き上げると、すっぽりと腕の中に収まる。

「ひや～

もうただ鳴ぐだけでもす、可愛いよ。

この辺じゃ、あんまり猫ちゃんを見かけることはないの、今日はついてるな……黒猫だなんて尚更だよ。みんな、黒猫が横切ると不吉なことが起こるとか言つてこるけど、私は猫の中では一番黒猫が好き。

黒い毛並みに、瞳は黄色で奇麗に輝いているから。

それに、よく考えてみれば普段中々会えない黒猫に会えたなら、それは寧ろ幸運だと思ひ。

「もう少し、こうしていたいけど、そろそろ行かなないと遅刻しちゃうから、バイバイだね？」

そう言つて、降りそつとして猫ちゃんは全く降りようとしないでへれなかつた。それどころかよじ登つてきて頭の上に落ち着いた。

「おひと……学校までだからね？」

「ひや～

呑気な声を上げる猫ちゃんを頭に乗せたまま、私は学校に向かつ

て歩みを再開した。

一時間後。

「エリだらう? エリ」

「エリや~?」

私と猫ちゃんはどりこいつか森の中にいた。

(どうして?)

## 方向音痴少女の遅刻

「ん……これは、またやつちやつたかな？ しまったなあ……道はちやんと覚えているつもりだつたんだけど。どこで間違えたのかな……とりあえず、家に連絡を……ん？ あれ？」  
「み？」

家に連絡を取ろうと思つて、鞄から携帯を取り出そうと手を突っ込み中を漁る。でも「こいつに見つからず、ポケットにも入つていなかつた。

「家に………忘れた」

ガク、と木が生い茂るどこだか分からぬ森の中で膝と手を付き頃垂れると、猫ちゃんが頭から落ちてしまった。なんとか無事に着地して、私を慰めてくれているのか手を舐めてくれる。

「ありがとう、猫ちゃん。こいつしていても何も始まらないし、とにかく歩こうか」

抱え直して頭に乗せ、とりあえず来た道を引き返すこととした。のは良かったけど、何とか森を抜け出した時には体感で一時間が経過していた。

(これじゃ、入学式は終わつてるな……まさか、初日から遅刻することになるとは思わなんだ。まあ、猫ちゃんに会えたから良いけど) 少し歩くと、道があつたからそこを道なりに進んで「こく」とこじた。

なんか途中で、猫の像とか猿の像とか、いかにもな雰囲気を醸し出している神社とか色々あつて、猫ちゃんがいなかつたら怖くて泣いてたかも知れない。

家も結構あつたけど、学生が多いのか、お年寄りが多いのか道には殆ど人がいなくて、途中で道を聞こつと思った家に限つて誰もいなかつたりした。その後、三件程回つた所でやつと起きている人に巡り会えた。

「なに？」

その人は、染めているのか地毛なのか分からぬけど、真っ白な髪をしていて、けど不健康な感じはしない青年だった。多分、私と大して年は変わらないと思う。

若干つり上がつた蒼い瞳に、見た目よりは鍛えられていそうな締まった体。

「（て、私は変態か！）あ、あの……私、水蓮高校に行きたいんですけど、場所分かりますか？」

「水蓮高校？　え、ちょっと待て、今日つて何日だ？」

「え？　四月八日だけど、それが……つて、どこのくの？」

質問に答えると青年は慌てた様子で中に引っ込み、その後すぐにバタバタと騒がしい音が聞こえてきた。

「どうしたんだうづね？」

「こや～」

猫ちゃんに聞いていると、その間に準備が済んだのか青年が戻ってきた。水蓮高校の男子の制服を着て。

何故か女子はセーラー服で男子はブレザー。ちなみに色は紫で、ズボンは縦線と横線が入ったチェック柄。

「え？ あなたも水蓮高校なの？」

青年はそりだよ、と乱暴に答えるながら家の鍵を閉めてかけだした。

「案内するから、付いてこい！」

「え！ ちよ、待つてよー！」

猫ちゃんが落ちないように、頭から降りてしまつかり抱えながら後を追いかける。

春先とは言え、陽が照っている中で走るのは疲れる。

必死で青年の後を追いかけながら、次第に見慣れた場所に出てきて、桜が舞い散る商店街に出た。

「ん？ 菊ちゃんじやねえか、学校はどうした？」  
「今向かってるどー！」

「は？」

「おい、話してる暇があるなら速く走れ！」  
「分かってる！ おじさん、また後でね！」

おじさんには手を振って、文句を言いながらも待ってくれていた青年の元へと走っていく。それからも、八百屋のおばちゃんや魚屋のおじちゃんに声をかけられたけど、全部後でね、と言つて走った。暫く走り続けて、漸く学校が見えてきた。

「着いた！」

校門の前で声を上げると、青年に静かにしろと軽く頭を叩かれた。

「せういえば、あなた名前は？」私は百合河薫。この子せ……モモ

ちゃん」

「は？ モモ？ まあ、こいや、オレは千同修輔せんどうしゅうぶ」

「え？」

一瞬聞き間違いかと思つたけど、せうじゅない。本当に父さんと同じ名前なんだ。

「（でも、当たり前か同じ名前の人なんて探せばいくらでもいるだろ？）私はまだ同じ名前の人とは会つたこと無いけど、いや会いたい訳でもないけど……それはともかく）修くんって呼んでもいい？」

「あ？ まあ、呼び名なんか何でもいいが。じゃあ、オレは先に行くぞ？」

「あ、まつてよ、私も行く。モモちゃん、建物の中には入っちゃダメだからね？」

「……」

桜の木の下に降りると、ビルからアパート歩いていった。敷地から出るつもりはないみたいだ。

（わー、私も早く行け！）

と思つて足を前に出すと襟を掴まれた。

「ビルに行くなつむつだ？ そつちは外だらうが

「あ……いや～、『めん』『めん』

修くんに引っ張られて、私はやつと校内に入ることができた。

恐らく先輩達だろう人達が、グランドで走つたりしていたけど、中にはあまり人影がない。入学式はとっくに終わっているんだから仕方ないけど。

職員室まで修くんに腕を引かれて連れて行かれて、ドアの前で修くんの方から手を離した。

中に入り、どの先生か分からぬから、とりあえず奥に座つている先生に新入生であることを伝えると遅刻してきた一人かね、と眼鏡を光らせて言われた。額ぐと、特に何を言われることも無く一年B組だ、と言われて、私たちはB組に向かつた。

教室の扉を開けて中に入ると、もうとっくにみんな帰つてたと思つてたけど真ん中の席に一人だけ女の子が座つていた。縁なしの眼鏡をかけていて、小さな文庫本を読んでいる。

髪の色は茶色で、目の色は赤。

何も言わず私たちの方を向いて、また本に目を落とす。

黒板に貼つてあつた座席表を見ると、まだ空いていることを示しているのか、一力所だけ白くて、後は全部赤い線が引かれていた。窓際一番後ろとその隣が空いていて、私が窓際に座つた。

「あ、狙つてたのに！」

「早い者勝ちだも～ん」

「ぐ、まあ、いいか。ここなら寝てもバレ無いだろつし。にしても、あれだな、来た意味なかつたな？」

「そうだね……そういうえば、修くんはどうして日付聞いてきたの？ もしかして一日勘違いしてたとかじゃないよね？」

「…………分かつてるなら聞くなよ」

「……なんか、ごめん」

「いや」

頬杖をついて、そっぽを向きながら言ひ修くんに謝るとやう返つてきた。

特にすることも無いから、私も両手で頬杖をついて足を「ブリブリ」とさせて、偶に窓の外を見ながら過ごしていた。

「修くんさ……部活とかするの？」

「なんだ、いきなり。しねえよ、面倒だし」

「そつか。あ、携帯持ってる？」

「ああ」

答えてブレザーの内ポケットから紫の携帯を取り出す修くん。

「ちょっと貸して？ 番号とメアド書くから」

「は？ んなことしなくても、赤外線で交換できるだひ？」

「私今日携帯忘れちゃったんだあ……それで、道に迷っても連絡取る手段が無くて、道なりに歩いてたら修くんの所にたどり着いたの」「迷うか？ 普通」

「方向音痴なもので」

「ああ、それでさつきも外に行こうとしてたのか。いくら何でも馬鹿すぎるだろ」

（そんなバッサリ斬らなくても……）

差し出された携帯を受け取り、鞄からメモ帳を取り出してメモする。それを千切って胸ポケットにしまい、今度は自分の番号とメアドを書いてそれを渡す。

「よく覚えてるな？」

「修くんは覚えてないの？」

「番号くらいこは覚えてるが、メアドとなるとそんなスラスラとは出てこねえよ。使う機会も殆どないからな」

「どうして？」

「する相手がいなくてな」「成る程ね……」

時計を見ると、時刻は十時半を指していた。また、静かになつた教室の中で、女の子が本を捲るパラ、という音がやけに大きく聞こえた。

## 方向音痴少女のお皿

外を見ながら、ふと風に当たりたいな、と思つて窓を開けた。桟に腰掛けて風に揺れる髪を押さえていると、下から鳴き声が聞こえた。

「あ、モモちゃん」  
「ん、わつきの猫か?」

「ど?」?

「ひゃ！ びっくりした」

いつの間に席を立つたのかも分からぬほど早さで私の隣から顔を出して、外を見る眼鏡の女の子。後ろを見ると、修くんもありの早さに驚いている様だった。

「猫、ど?」?  
「え? あ、下」

モモちゃんは下から私を見ていたから、指をしたに向けて指し、私もそこを見た。

でも、

「「いない」」

モモちゃんはいなかつた。  
モモちゃんはいなかつた。

「上だよ。気付けアホ」  
「上? あ、ホントだ」

修くんに言われて、上を見ると、モモちゃんが身を乗り出して私を見ていた。踏ん張っているのか、体がプルプルと小刻みに震えていて、そんな頑張っているモモちゃんを見ると和む。手を上に持つて行き、ちやんと上に乗せて眼鏡の娘に「こりだよ」と示して言つと、女の子はモモちゃんをじっと見つめた。座つてから分からなかつたけど、この子は私よりも身長が低かつた。どれくらいかと言うと、母さんくらゐ。だから、十センチ近くは身長差があることになる。

「それはそうとして

「モモちゃん、いつの間に頭に乗つたんだろ? 修くん見てた?」

それが疑問だつた。  
だつて、全く気が付かなかつたし。

「お前が驚いてる間に乗つてたぞ?」

もうだつたんだ。速いな、モモちゃん。

「前世は忍者かもね~」

「『ローロ』

上に手を持つていい、頭を撫でながら言つと、気持つよれわづて口喧を鳴らした。

「その子、モモつひいつの?」

「うん。なんか、ぴつたりな氣がして……あ、私は百合河菊。で、あつちが修くん。貴女は?」

なんか、なんでオレは短縄されてるんだよ、とか聞いれたけど今は無視無視。

「海野華」  
（ひののはな）

「華ちゃんか。これからよろしくね？」

華ちゃんは一いつと頷いた。うん、静かな子だ。

「オレは十回修輔な？ 断じて修くんが名前じゃねえだ？」

「え～……いいじゃん、修くんで」

「お前は熙くてもオレは熙くねえ」

と、そこでグウ～、と誰かのお腹が鳴り、腹減ったあ、と修くんが天井を仰いで言った。発生源は修くんらしい。そういえば、今日はお弁当を持ってきてないんだった。

「私もお腹すいた。さつさ走ったからかな？」

「それしか考えられねえよ…………オレなんか朝飯食おうとした所でお前が来たんだぞ？」

「日付間違ってるからでしょ？ それより、どうする？ 『ははん買いいに行く？』

「やうだな。なあ、海野、学食の場所とか分かるか？」「…

華ちゃんは頷いて、付っこもあり、と並んで歩き出した。

「モモひささん、すぐに戻つてくから待つてね？」

「うー

「よしよし」

桟に降ろして言つと、ちゃんと返事をするモモちゃんの頭を撫でて、外に降りたのを確認して先に行つていた修くん達の後を追つ。もづ少しだ見失う所だった。

「待つてくれても良いのに」

「校内でも迷うのか？ お前は」

「ふふん。中学校でも一日一回は迷子になつてた」

「威張ることじゃない」

「全くだ」

「う……一人とも冷たい（心にぐっさりと刺さつたよ）」

迷うことなく進んでいく華ちゃんの後に付いて、校内を進んでいき数分歩いた所で学食に到着した。私は、まずは学校の構造を少しでも覚えておこうと思い、壁に掛けてある地図を見た。

ここ水蓮高校は、北と南の二つの棟に分かれていて、北に普段の授業を行う教室があるが、南は科学や生物の実験に使う教室や音楽に使う教室がある。二つの棟の間には庭があつて、そこでご飯を食べる事もできるらしい。

「ご丁寧にそう書いてある。

それから、一つの棟とは別に図書館がある。ここは図書館はかなりの蔵書量があるのか、一棟まるまる図書館に使つてゐる。一体何冊の本があるんだろう？

体育館はグラウンドの隣にあつて、他にもテニスコートとかもある。

（強いのかな？ 四面もあるなんて。それとも単に人数が多いだけかな？ まあ、いいか）

職員室は一階の奥にある。学食も同じく一階で、職員室とは反対の位置にあつて、気合いを入れる所が間違つてゐると思つ。外には日

傘付きのテーブルまであった。

とりあえず地図は見終わったから、私も何か買おうと思つて券売機に向かつた。

「どれにしようかな？」

後ろには誰も立っていないから、ゆっくつ考えて決めることにして、上の列から順に見ていく。

唐揚げ定食にしようと決めて、五百円硬貨を入れてボタンを押そうとした所で、

「あ、母さんが待ってるか……」

昨日、今日はお昼前には帰るからと言つたら、お昼ご飯作つて待つてるからね、と言つっていたのを思い出した。

「無駄遣いはしちゃ駄目だよね

払い戻しのレバーを引こうと手を伸ばすと、後ろから声をかけられた。振り向くと修くんと華ちゃんがパンを持つて立っていた。

「あ、少し待つて。お金戻したら」

「あ

「え？」

言つている途中で修くんが後ろを見て声を上げ、直後聞こえてくるピ、という機械音と小銭が落ちてくる音。振り向くと、私よりも五センチほど高い女子生徒が立っていた。

キャンディなのか、小さな白い棒が口から出ており、赤い髪がワイルドに跳ねていて、前髪は一本の黄色いピンで留められている。

瞳の色は蒼で、少しつづき上がっている。

「てー、何勝手に人のお金で券買つてるのー。」

呑気に観察なんてしてる場合じゃない。しかも、この人が買った券には四百円と書かれている。つまり、お釣りは百円だけ。ああ~、四百円も無駄に使つてしまつた。

「ん？ だつて、お前そいつらと話してたし、別にいいだろ？」  
「良くない！ はあ……もうこい、この百円も貴女にあげる。行こ

う、修くん、華ちゃん」

「おい！ いいのか、何も買わなくて」

「母さんが家でご飯作ってるから、いいの」

乱暴に答えて学食を一人をつとめて出て行き、教室へと歩いていく。

「そつちは職員室だ」

また、襟を掴まれて、動きを止められる。それから、今度は手首を握られてそのまま華ちゃんの後を歩いていく。

視界の隅で、さつきの人気が百円を指で弾いて遊びながら私たちを見ていたのが見えた。

(やつぱり百円は取つておくんだった)

教室に着いた所で、窓によりモモちゃんを呼ぶと、近くにいたのかすぐにしてきた私の頭に飛び乗ってきた。流れでなんとなく、華ちゃんも私の前の席の椅子を回転させて座り、メロンパンをもく

もくと食べ始める。

「お前、帰らなくていいのか？ お袋さん、待つてるんだろ？」

「……一人で帰れるか不安」

「お前、家にすら帰れないのか？」

修くんは呆れながら言つてきた。確かに学校から家まではそんなに曲がつたりする訳じゃないけど、朝があれだつたからどうしても不安になる。商店街の人達の手を煩わせる訳にもいかないし。

「（でも、早く帰らないと母さんも心配しちるだらうし）なんとかする」

「はあ……少し待つてろ、分かる所まで送るから」

「え？ いいの？」

「それくらいはな」

言つて、修くんはすぐパンを食べた。席を立ち鞄を肩に掛ける。

「じゃ、行くか。海野……も帰るみたいだな

「え？ おお、いつの間に」

華ちゃんを見ると、どうやったのか既に鞄を右手に持つていた。でも、口元にチョココロネのチョコが付いていた。近づいて、人差し指でそのチョコを取り舐める。

「ん、甘い。じゃ、行こつか？」

「お前……まあ、いいか」

「ん？ あ、モモちゃんは、また外で待つててね？」

「いやっ！」

元気な返事をして頭から飛び降りたモモちゃんを見送り、窓を閉めて、今度は最初から修くんに手を引かれて三人で歩き始めた。私はそんなに信用がないのだろうか？

そう思いながら、前を歩く華ちゃんを見ると、耳が赤くなつていた。

「華ちゃん、赤いけど大丈夫？ 熱あるんじゃない？」

「問題ない」

「そう？」

「アホ」

引っ張られながら、何故か修くんにアホ呼ばわりされてしまったけど、どうしてだらうか。

## 方向音痴少女の下校

「どうして付いてくるの？」

「暇だから」

私たちが昇降口で待っていたモモちゃんと一緒に校門から出ると、何故か私の五百円の内四百円を勝手に使った人が柱に寄りかかつていた。その時にリボンが見えて、とりあえず先輩と言うことは分かつたけど、敬語は使わないことにした。理由は使いたくないから。

「おい、百合河、そいつに気を取られて手を離すなよ。」

「あ、うん」

「そういうや、お前ら、教室戻る時もそんな感じだつたな？　なんだ、つきあつてるのか？」

「違えよ。」  
「いいつ、目を離すとすぐにあらぬ方向に行くんだ……昇降口が目の前にあるのに、校門の方に行つたりもしてたからな」

「修くんだって、日付勘違いしてたでしょ？」

そういうと、修くんは少し言葉に詰まって、結局

「うひせ」

としか言わなかつた。

歩いているのは商店街で、何度か朝のおじさんやおばさんに声を掛けられて、何分か話したりしていた。話している間くらい大丈夫と思うけど、修くんはその間も手を離さず、そのことに付いて色々聞かれたりした。

「菊ちゃんのいい人かい？」

私が違いますよ、と直むとする

「やつなんですよ。学校の中でも手を繋いでて、見せつけてくるんですよ？」

と、えっと、お前の知らない先輩が言った。

「違う。単に彼女が方向音痴だからそれを防止しているだけ」

でも、それを華ちゃんが短くけど簡潔に否定した。

「なんだい、菊ちゃんにもやつと春が来たかと思つたんだけじねえ……あ、そういうば、晴ちゃんから何か連絡はあつたかい？」

「いえ、まだ何も」

「そうかい…………ま、気を付けて帰りなよ？」

「はー」

話は終わつたので、私たちは手を振つておばさんと別れた。

そして、また歩いている途中後ろにいる先輩が、さつきの晴ちゃんて誰のことだ、と聞いてきた。

「わたしも気になる」

「いや～」

モモちゃんも気になるのか、単に鳴いただけなのか。修くんは何も言わず手を引いている。

「私の幼馴染み。中学生の時は近くに住んでたんだけど、卒業したあと、なんか、特訓だー、とか言ってジャージでどこかに走つて行

つちやつたの」

「何も持たずにはいか?」

「いくら向でもそれは無いと思ひついで?」

「それが……ホントにジャージを着てただけで、財布とかを持つてゐる気配も無かつたんだよね」

「馬鹿だろ」

修くんと先輩の声がハモつた。

「あ、ちやんて付いてるから分かると思ひけど、女の子だよ?」

「は!?」

「あの人があの人がそう呼んでいるだけだと思つた」

勢いよく振り返った修くんと先輩の驚きの声。それと華ちゃんの声。なんか賑やかだなー、と思つた。

モモちゃんは偶に舞つて桜の花びらにパンチをしたりしていながら、時々「ヤツ!—ヤツ!—」という鳴き声が聞こえる。

「昔から元気な子なんだよね……思い立つたら吉田をそのまま体現しているつていうか、まあ色々巻き込まれたりもしてたけど。後、陸上の大会を総なめしたりとか」

私が知つてる限りでも、晴ちゃんは風邪を引いたりしたことが無いし、小中の九年間無遅刻無欠席だった。高校は、色々な所から推薦の話が来ていたみたいだけど、それを全部蹴つて水蓮高校を受験した。

結果は、合格だったけど、通つ前にどこかに行つちやつた。

「まあ、今もどこかで元気にしてるとと思ひよ~。」

というか、元気な姿しか知らない。

唯一心配な点は、彼女が寂しがり屋なことなんだけど、とりあえず何かが近くにあればそれで紛らわすことができるから、大丈夫だとは思う。

「あ、そうだ。あたしの名前は海野柊<sup>ひのみのひいらき</sup>。華はあたしの妹だ」「…………は！？」

今度は、私と修くんが驚いた。

だって、似てる所が全然無いし、と思つてると、先輩が話し始めた。

「やっぱり聞いてなかつたんだな。まあ、学校で会つても声すら掛けてこないから、無理もないが。それはそうと、学食で見た時と出てきた時は意外だったよ。華が他の奴らと一緒にいる所を、あたしは見たことが無かつたからな」

そう言つて、華ちゃんの頭にポンと手を置く先輩。そのまま、少し乱暴に撫でられて、けどどこか嬉しそうな顔をしている華ちゃん。この光景を見ていると、確かに一人は姉妹だつてことが分かる。

「お前達、今日が初対面だろ？ なのにこいつが懐くなんてのは、相当珍しいぞ？ まあ、その猫に興味が沸いたんだと思うが」

私の頭に乗つているモモちゃんを見ながら、先輩は言つて、隣では華ちゃんも、モモちゃんを見ていた。

それから先輩はスカートのポケットに手を突っ込んで、何かを取り出し私に投げてきた。反射的にそれを取り、見ると百円だった。

「さつきは、悪かったな。それは返す」

「……いこよ、別に」

「それから、敬語を使え」

「それだけは断る」

私は笑顔で拒否した。

「ああ、オレもあんたには敬語は使わいんで、あしかりや」

「たく、かわいげのない奴らだな」

「菊は可愛い」

「え？ 何かいった？」

「なにも」

華ちゃんがボソ、と何か言って聞き返すとそのまま返ってきたから、私はまた前を向いて修くんに手を引かれながら歩いた。

それから、家までの道なりを説明しながら歩いたけど、先輩が私の道案内で大丈夫なのかと言つたので、修くんの携帯を借りて家に連絡を入れることにした。

電話に出た母さんに、事情を話そぐとすると迷つたことは分かつていたみたいで、道を説明してくれた。それから、電話を修くんに替わると、母さんは少し驚いたのか、その声が離れていても聞こえてきた。

母さんの言う道順を四人と一匹で進んでいき、十分後、無事家に到着した。

「え？ いえ、そんな。あ、はい…………はい、分かりました」

修くんが何かを母さんと話していく、最初は遠慮していたみたいだけど、最後は頷いて電話を切った。

「どうかしたか？」

「お前のお袋さんが、折角だから寄つて行けって行けってさ。いいのか?」「ん? かまわないけど?」

別に何がある訳でもないし。

こうして、三人は母さんに招待され、家に寄ることになった。とりあえず、無事に帰ることができ良かった。

(明日からは携帯を忘れないようにしないと)

## 方向音痴少女の友達

家に入ると、母さんが玄関で待つてくれていた。私がただいまと言つと、母さんもお帰り、と返ってきて、手には私の携帯を持つており今から鞄に入れておきなさいと言われた。はーい、と返事をして鞄のポケットに携帯を入れて、修くん達に向き直ると

『…………』

三人とも揃つて、間の抜けた顔をしていた。

「あ、母さん、この人がさつきの電話の人」

手で示しながら紹介し、次いで後ろのいる華ちゃんと柊さんも紹介する。そして、母さんが多分お礼か何かを言おうと、口を開き掛けた時、

『母さん！？』

と三人が大声でハモつた。どうでもいいことだと思つけど、華ちゃんも大声を出したのが意外だった。

「まあ、確かに驚くわよね……見た目中学生に見えても不思議じゃないし。どうぞ？」

リビングに通して、父さんにただいまと言つてテーブルに掛ける

と、母さんがお茶を五人分出してくれた。モモちやんのことは、多分自分で責任を持ちなさい、と言つことだらう。何も言わなかつた。

お茶を勧められて、修くん達は一口飲んでホッと一息ついた。

母さんの煎れるお茶って、普通のお茶の筈なのに何故カリラックスできるんだよね。

「身長が中学生の時で止まっちゃつてね。それからはずつといの身長よ。まあ、その御陰で修くんに肩車されても周りからは兄妹に見えてたから、良かつたけどね」

「え？ オレ？」

「え？」

「あ、この人、名前が千回修輔つていうの、それで私が修くんつて呼んでるから…………父さんの名前の修輔なんだよ？」

「そりや、面白い偶然があつたもんだな」

柊さんがモモちゃんの頭を撫でながら言つた。

「ホントね……全く似てゐる所なんて無いけど、ビツしてかしい。  
何か

「うん…………何かが、似てる感じだよね？」

「ええ」

父さんに挨拶をした後、座つていた修くんを見た時、何故か一瞬父さんと姿が重なつた。単に座つている場所が父さんの席だつたらなのか、父さんを見た後にその場所を見たからなのかは分からなければ、母さんも何かを感じたみたいだつた。

「自己紹介がまだだつたわね。わたしは百合河桜。菊の母親よ」

お茶の入つたグラスをおいて、母さんは自己紹介をした。

「海野柊だ」

「海野華」

「百合河に言われたけど、一応。千同修輔ツス」

三人もそれぞれ自己紹介をする。

「修くんと華ちゃんは、同じクラスで、柊さんは先輩……尊敬はできなさいけど」

「あ？ 今なんつった？」

「別に何も？」

小声で言つたのに、聞こえた様で立ち上がる柊さん。けど、母さんに宥められてまた席に着く。と、そこで私のお腹がクウ～……と鳴つた。

「つー」

バツとお腹を押さえても時既に遅し。バツチリの場にいる全員に聞こえてしまつた。

「やういえば、お皿まだだつたわね。みんなも食べる？ お好み焼きにするんだけど」

「ホント！？」

「ええ、昨日話を聞いた時から、菊の好きな物を作ろうつて決めてたのよ」

「やつたー！」

椅子から立ちあがつて両手を天井に掲げて喜びを表現して、そういえば修くんたちがいるんだつたと思い、見ると修くんと柊さんが

「ヤーヤしながら私を見ていた。心なしかモモちやんも笑っている気がする。華ちゃんは、見てませんよ、といつ風にそっぽを向いていた。

(止めて！ それが一番辛いの…)

「子供だな」  
「うつさい」  
「ふふ。それで、みんなはどうするの？」

柊さんと私のやり取りを見て頬笑み、母さんは改めてみんなに聞いた。

「こいつがそんなに喜ぶってことは、美味いんだろうからな……頂くよ」  
「なんでそんな偉そうなんだよ？」  
「お前は気にならないのか？」  
「……なるけど」  
「わたしも頂きます」  
「分かったわ。少し待つてね？」  
「あ、手伝いますよ」

修くんが先に席を立った母さんの後を追つて行った。

「あら、気を遣わなくともいいのよ？」  
「違いますって。オレ、一応一人暮らしなんで、料理は大抵できるんツスよ？」  
「え！？」  
「菊は料理がからつきしなのよ」  
「あ……何となく分かるツス」

「ちよー、『じつ』の意味?...」

それには答へず、母さんと修くんは合所に並んで立ち準備を始めた。

(それにしても、料理までできるなんて、ホント父さんとは似ていな……他の所も、反対だったりするのかな?)

私たち田舎河一家は、三人揃つて黒髪だ。そして、修くんは全く正反対の白髪。地毛かどうかは分からぬけど。じつと見ていたからか、母さんが一瞬だけ私を見て、何かを修くんに聞いた。

(何だろ? まあ、いいか)

「料理がからつきしねえ……」

「なにか?」

「いや、別に?」

「別に?」

さつきのお返しと言わんばかりにとぼける修さん。

「姉さんも料理は全くできなー」

「なつ! じら、華!..」

「ふうん」

「な、なんだよ?」

「別に?」

さつと、悔しかつて拳を握る修さん。

「似たもの同士」

「断じて違う!..」

「ピッタリ」

「「偶々よ（だ）！ 真似しないでよ（するな）！..」」

私たちは睨みあつて縄張り争いをする猫の様に威嚇し合つた。

\*

「何やつてんだかな？ あの一人は」

お好み焼きの元が入つてゐるボウルをゅっくりかき混ぜながら、ため息混じりに言つと隣に立つてゐる百合河のお袋さんがくすくすと笑つっていた。さつき、この髪が地毛かどうか、聞かれたが何だつたのだろうか。

ちなみに地毛だ。

オレの一家はどういつ訳かみんな髪は白い。余程先祖の血が濃いのだろうか？

「どうかしたんすか？」

「ふふ、いえね？ あの娘が、ちゃんと学校に辿り着けるのかだけでも不安だったのに、まさか初日からお友達を連れてくるなんて思つてなかつたから……無事に着いたみたいで良かつたわ」

「あ～…………あいつ、朝見事に迷つてましたよ？ まあ、その御陰でオレも今日が始業式だつて、分かつたんですけど

「あら、そうだったの？ 迷惑を掛けちゃつたわね？」

「いえ、結構楽しかつたツス」

これは本当のことだ。小中の時は、この髪の御陰で、教師からは

喧しく言われたり、不良からも多少絡まれたり、避けられたりと色々あつたが、あいつは何も言わず接してくれたしな……何より、気を遣わなくていい相手というのは、久しぶりだつたし。

海野姉妹も、特に何か言って来たりはしないからな。  
百合河のお婆さんも。

「あら、 そうなの？」

「はい。 こう言つちゃなんですが、 あいつが方向音痴で良かつたつて思いました」

「聞いてたの？ あの子のこと」

「はい。 本人は特に気にしてないみたいッスね？」

「そうね………… それがあの子の長所でもあって短所でもあるかも知れないわね」

「そうッスね」

未だにらみ合つて立る一人を見て、 オレとお婆さんは暫く他愛のない会話をしていた。

\*

「さ、 できたわよ~」

「待つてました！」

「な！ おわ！」

母さんと修くんがお好み焼きを持ってきて、 そっちをバツと振り向くと、 栄さんが倒れた。 何やつてるんだか。

「栄さん、 あまり暴れないでくださいね~？」

「ぐ、この」

「姉さん、おとなしくして」

「たく……分かつたよ」

「いや～」

モモちゃんが、またいつの間にか私の頭に乗っていた。ホントに  
気付かないんだけど……。

全員に配つて、手を含わせて頂きますと黙つて、後はお好みでね、  
と母さんはソースやマヨネーズをテーブルにおいた。  
マヨネーズをかけようと、手を伸ばすと誰かの手とぶつかり、見  
ると柊さんだつた。

「私が先」

「いいや、あたしだ

「私！」

「あたしだ！」

「やつぱり似たもの同士」

「違うーー！」

「いや、似てるよ、おめえらは

「そうね」

まさかの修くんと母さんにまで言われた。

その後、昼食はとても賑やかに進み、どうこう流れか三人は今夜  
家に泊まることになつた。

(まあ、いいか。楽しそうだし)

と、思いの外樂しみにしている自分がいた。



## 方向音痴少女の入浴

「どうして、一緒にに入るかな？」  
「広いんだから良いだろ？ ケチケチすんな」  
「だからって浴槽に三人で入ることはないと思つ」  
「…………」「

私がお風呂に入ろうとしたら、何故か先に柊さんと、柊さんに引張つてこられたであるつ華ちゃんがいた。流石に修くんはいなかつたけど。

まあ、結局流れで一緒にに入ることになり、順に体を洗つたのは良いけど、その後、何故か三人一緒に浴槽に入った。

(いくら広いって言つてもね？限度はあるんだよ)  
「三人は、狭い」

全く以て華ちゃんの言つとおり。

「だいたい、柊さんは考えが単純なんだよ……普通に考えれば三人は狭いこと位分かるじゃん」

「ハツ。学校にもまともに辿り着けないお子ちゃんに言われたくないね」

「それはすいませんね？ なにぶん、そちらより少しばかり子供な物で」

「ホントに子供だな？ 出ると」は出でないし  
「なによ！」  
「なんだ！」  
「二人とも、わたしを挟んで怒鳴らないで。つるさこ」  
「あ、すいません」

立ち上がつてすぐ華ちゃんに言われて、私と柊さんはゆっくりと、また湯船につかった。学校でもそうだったけど、華ちゃんつてハツクリスツパリ言つから、反論の余地がないんだよね。と、考えていると視線を感じ、見ると柊さん私を睨んでいた。

その日は、お前の所為で怒られただろ、と言つており、その日にお互い様でしょ、と返すと先に吹つかけてきたのはお前だろ、と返ってきたから、また、乗つたのはそっち、と返す。

「（で、なんでこんな日で会話してるんだ私たちは……）あ、華ちゃん、私たちのクラスの先生ってどんな人？」

職員室に行つた時も離したのは教頭先生だけだから、担任どじろか他の先生すら分からんんだけど。

「黒いスーツを着た女の人。自己紹介で、友達がいないから仲良くしてください、と言つていた」  
（……どうなんだろう、それは。先生として、どこつかそんなことを自己紹介で言つのは）

「貴女と千同くんがいつまで経つてもこないから、何かあったのかと終始心配していく、最後は半泣きだった」

「うん、来週はまず謝りに行こう」

修くんに引つ張つて貰つて。

「全く、なにやつてんだかな？」

「そついいえば、柊さんの担任はどんな人なの？」

挑発つぽいことを言われたけど、乗るとまた華ちゃんに怒られるから話しづを変えた。華ちゃんがいない時ならいつでも受けて立つけ

ど。

「ん? まあ、普通の奴なんじゃないか?」

「知らないの?」

「興味もないからな…………それに、教師だらうと何だらうとあたしに近づく奴なんて、物好きはいないよ」

「もうかな?」

確かに言い合つてばかりだけど、この人は一緒にいても嫌な気分になる人じゃない。出会いはあんなどったけど……うん、それはおいておけ。思い出すと少しむかつくから。

「私は柊さん、別に嫌いじゃないけど?」

氣を遣つ必要がないし、華ちゃんのお姉さんで先輩といつこととか知らないけど、なんかそんなのどうでも良いことも思うし。

「あたしのことを知つたら、すぐに嫌いになるわ」

「ならないよ」

「どうして言い切れる?」

「勘」

なんだよそれ、と柊さんは吐き捨てる様に言つて立ち上がった。続いて私と華ちゃんも立ち上がる。蓋をして、脱衣所でまた少し話しながら、体を拭いてパジャマを着る。柊さんは私のパジャマを着て貰つて、華ちゃんは母さんの服を着て貰つた。

脱衣所から出ると、そこではモモちゃんが座つて待つていた。私を見て、すぐさま頭に飛び乗る。まさか一足飛びとは……流石猫。でも、すぐに降りた。

「」

「濡れているから」

「あ、成る程」

納得して、抱きかかえると、すっぽりと腕に収まつた。リビングに入ると、母さんと修くんが楽しそうにおしゃべりをしていた。

「母さん、上がったよ？」

「あ、ええ。修輔くん、先に入る？」

「いえ、オレは最後で良いツス」

「そう？ ジヤ、先に頂くわね？」

「はい」

それから、母さんはリビングを出て行つた。テーブルに座り、何を話していたのか聞くと、私の小さい時の話しなんかを聞いていたらしい。そんなの聞いても、なんの得にもならないと思つたけど。

「中学ん時に、一駅離れた隣街まで行つたんだって？」

「そりなんだよね……晴ちゃんがいたから良かつたけど、一時はどうなるかと思つたよ」

「ある意味すげえな。あ、そういうやさつき、お母さんにこの髪が地毛かどうか聞かれたんだけど」

急に話しづをえて、修くんはそう言つた。多分、準備をしていた時だつ。何か母さんが修くんに聞いていたし。

「あ、それ私も気になつてた。地毛なの？」

修くんは頷いた。

「オレの一家は、どういって訳か親父もお婆も白髪なんだよな

家とは反対だ。

「最初は、染めてんのかと思つたぞ？」

「その所為で、小中は面倒なことが結構あつたんだよ。だから、喧嘩も少しくらいならできるが、人を殴るつてのは余りいい気分じゃねえな」

「それは至つて普通の感情」

「…………だな。なあ、トランプかなんかねえのか？　ずっとおしゃべりつてのは、疲れるんだが」

「私はそれでも良いけど」

別に色々話すのは苦ぢゃないし。まあ、お友達のリクエストには答えましょ。

ちょっと待つて、と言つて、私はトランプを取りに浴室に向かつた。流石に家のなかでは迷子にならないから、数分でリビングに戻つてくれることができた。

「なんだよ、また迷うかと思つたのに」

「ご期待添えなくてすこませんね」

「全くだ」

「まあ、来週からは、絶対迷うからもし遭遇したら案内してくさいね~」

「会わない」とを祈るよ」

それからトランプをして、華ちゃんが無双した。

「「こつにカードゲームとか、させたら絶対に勝つんだよ」

華ちゃんの意外な一面を知った瞬間だった。

その後、上がった母さんと入れ替わりで修くんがお風呂に入り、  
上がつて来た所で五人でトランプをした。うん、まあ……強い  
ね、華ちゃん。

## 方向音痴少女の就寝

「あのれ…… やつを、学習しなかつたの？」

「いいだろ？ 何とか入ってるんだから」

「すう…… すう……」

私と華ちゃんと柊さんは三人は、今同じベッドに川の字になつて寝ている。電気はまだ点けたままだけど、華ちゃんは寝付きが良い様で、すぐに眠った。

だから、私と柊さんは小声で文句を言いつっている。  
ちなみに修くんは父さんの部屋で寝ることになっているけど、まだ全く眠くないようでリビングで母さんと話している。結構気が合うみたいだ。

モモちゃんはも、今は下にいる。

「まあ、いいけど…… 落ちても知らないから」「残念だつたな？ あたしは一度もベッドから落ちたことはないんだよ」

「なんだ。つまんないの。そういえば、柊さん達の母さんと父さんはどんな人なの？」

「……」

そう聞くと、柊さんは天井を見たまま黙ってしまった。聞こえやいけなかつたこと、かな。

「謝らないんだな？」

「謝つても、発言を無かつたことにはできないよ」

「……確かに」

笑いながら、言つて、柊さんは一言、

「死んだよ」

と答えた。

柊さんが中学一年生の時、両親は仕事で出かけた先で事故に遭つたらしい。山の奥にある別荘で、その仕事をすることになつていて、そこに向かつている途中で……その前日は大雨が降つていて、地盤が柔らかくなつていた。

「少し考えれば……いや、考えなくても、危険があることは分かつていた筈なんだ。でも、結局当事者にならないと分からんんだよな? 一人もきっと、自分の身にそんなことが起じるなんて思つて無かつたんだ……」「

「私だつて思わないよ」

「そうだな。あたしと華だつてそうだった……聞いた時は、とても信じられなかつたよ」

(その気持ちは、私も分かる)

父さんが病に伏して、助からなかつた時、私も母さんも、その現実を受け入れることができなかつた。それでも……どれだけ願つても、その現実が変わることなんてあり得なくて、結局は受け入れるしかないんだ、って、無理矢理に受け入れた。

今は、昔の様に笑つていられるけど、それは晴ちゃんの御陰でもある。

落ち込んでいた私たちを、いつも励ましてくれた。

でも、やっぱり私は子供だったから、晴ちゃんにはお父さんもお

母さんもこるから、そんなことが言えるんだよ、って怒つたりもしてしまった。

それでも、晴ちゃんはずっと励ましてくれて、その畳の上に次第に私も母さんも笑顔を取り戻していった。

晴ちゃんには、助けられてばかりで、だけど、まだ何も返す」とができないない。

(早く戻つてくれると良いんだけど)

「でも、結局それは現実で、受け入れるしか無かつたんだよな……それからは、あたしも華も変わった。でも、良い方向じゃなくてさ……あたしは喧嘩とかするようになつて、華は前の明るさが全く無くなつて、本ばかり読むようになった

「それは、今も?」

今日の華ちゃんと柊さんを見ての感想だけど、二人の間に距離があるわけでは無いと思う。柊さんに頭を撫でられていた時の華ちゃんの顔は、確かに「妹」の顔だったし、柊さんは「姉」の顔だった。

「分からぬい……」つてのが、正直な所だな。変わつてしまつたから、どこで戻れば良いのか分からんんだよ」

「そんなもんなんだね?」

「そんなもんなんだよ」

「……お休み」

「ああ」

リモコンで電気を消して、目を瞑ると、急に静かになつた所為か、華ちゃんの規則正しい寝息が大きく聞こえた。

開けていたドアからモモちゃんが入ってきて、静かにベッドに飛び乗つて、丸くなつたのを見て、私の意識は闇に落ちた。

\*

「なんだ、寝てなかつたのか？」

「なんか、寝付けなくてな……」

寝る前にあんな話をするんじやない……色々思い出してしまつた。

「お袋さんは？」

「ついでつき部屋に戻つた。モモが来てたろ？」

「ああ、そういうえば来てたな。器用に百合河の上に乗つて丸くなつてたよ。それがなんか関係あるのか？」

聞くと、お袋さんがモモを部屋の前に連れて行つたらしく、全く気が付かなかつた。

「それより、眠れないならなんかテレビでも見るか？ 小さい音なら、問題ないって、言われてるし」

特にやる」とも無いから、あたしは頷いてテーブルに腰掛けた。千同がリモコンでテレビを点け、チャンネルを色々変えているが、結局なにも見つからなかつた様で、特に面白くもない番組の所でそれを止めた。

その番組は、何か芸人が街を回る内容だったが、詳しいことは何

一つ分からぬ。途中からなんだかう当たり前ぢや当たり前だが。あたしも千同も、なにも喋らずテレビを見ていたが、暫くして千同が口を開いた。

「お前が、皿合河の」と、びりゅう。

(こきなり何を言つてゐるんだ? ここつけ)

そう思つたが、何も話さないよつはマシかと思つて率直な感想を言つと、千同は笑つた。

「オレは面白いと思つたよ。なんか色々な意味でな」

「確かに……ホント、面白いもんだよな? あたし達、今日会つたばかりだつてのに、家に招待されて、昼飯と晩飯を食わせて貰つて」「風呂も借りて、どうこう流れか泊まることになつて……考えもしぬかつたよ」

「あたしだつてそりや。なあ、明日どうか行かねえか?」

「どこにだよ?」

「どこだらうな?」

「何だよそれ

千同は笑いながら言つて、またテレビを眺め始めた。

あたしも同じように、またテレビに視線を戻すと、もう番組は終わっていて、次にある番組の内容を少しだけ紹介していた。

「なんかさ……高校つて、もつと退屈な所だと思つてたけど、意外とそうでもないんだな?」

「そうかも知れないな? あたしも、これから的一年には少しばか

り期待が持てるよ

あたしのことを知らないからだろうが、百合河も千同も他の奴みたいに、怖がって声を掛けてこないなんてことをしない。別に知られた所で、あたしは何とも思わないだろうが……そつだな、華とは三年間、仲良くしてもらいたい。

あたしと華も、仲が悪い訳じやない。良好とも言えるだろう。でも、あたしはどうしても一年早く卒業してしまつから。まさか留年する訳にも……いや、それもいいか？

(まあ、いいか。とりあえず、この一年は迷つよつて過へんやつ)

「なあ、色々教えてくれよ。学園祭とか、体育祭とかさ」  
「ん~？」教えるつつても、あたしどっちも真面目に参加してなかつたからな。それでもいいのか？」

「おう。まあ、雰囲気だけでも教えてくれればな……あ、後、校内で迷わないようにするこばぢりすればいいかも」

「悪い、それは無理だわ  
「ハハ……だよな」

いぐり一年早く、入つてじるからと書つても流石に校内で迷わない方法は知らん。

「(とこにか普通は数日で慣れるからな)月曜から頑張れよ?」  
「……やつぱりそうなるよな」

「ああ」

まあ、その内それが当たり前になるんだろ。

「いつそのこと紐で手首を結ぶか?」

「それはどうかと思つた?」

とりあえず、明日は何があるか楽しみだな。

こんな感覚は久しぶりだ。

## 方言音痴少女の外出

「おはよう～」

「「～や～」

『おはよ～（おひ）（おせよ）』

起きると、既に華ちゃんも終さんも起きていて、布団の上で寝ていたモモちゃんを抱えて降り挨拶をすると、母さんと華ちゃんは普通に返してくれた。修くんも、まあ、普通だと想ひ。でも、終さんのおせえよ、せどりかと思ひ。

(まあ、ここや)

修くんは、また母さんの手伝いをしてくれて、華ちゃんは本を読んでおり、終さんはテレビを眺めていた。  
私は椅子に座りながら言ひた。

「遅いって言つても、まだ七時だよ？」

木田にしては早いこと思つた。

「遊ぶ時間が少なくなるだろ？が」

「遊ぶつて？」

「今日は、わたしたち全員で遊園地に行へりとなつた」

匂を返すと、華ちゃんは簡潔に説明してくれた。

(それは、良いけど……遊園地か、私にとつては危険な場所だな。可愛い物も結構あるから、それに気を取られてあつちに行つたりこ

つちに行つたりしちゃうじ。前に三人で行つた時も、何度も迷いそうになつたことか）

詳しく述べと、発案者は母さんらしい。

高校生は一生に一度しかできないんだから、休みはの田は家にいるんじやなくて楽しいことを見つけて思いつき遊びなさい」と。

「勉強は最低限やつていればいいわ。わたしも高校の頃は、いつも修くんに連れ出されて色々な所に行つたから……楽しいことは沢山経験しないとね」

確かに。

私が産まれた後も、父さんのそのアグレッシブな所は変わらず健在だつた。私も母さんも休みの日はいつも父さんに起こされて、眠い目を擦りながら準備をして、でき次第引っ張つて行かれた。

何も知らない人が見たら誘拐に見えてたと思う。

（今では良い思い出だけど）

父さんの遺影を見ながらそんなことを思つ。

行き先は、この辺ではメジャーな「マリンゴールド」と書く遊園地で、水を使ったアトラクションが全体の約七割くらいを占めている。だからなのか、普通に園内を歩いているとどこからか突然水が飛んでくることがあるため、雨具を持ってくることを、園側も勧めている。

それなら入り口で配れば良いのに、と思つけど、要らなこと言つ人もいるからね。

ちなみに私たちには要らない方です。

父さんがね、

『いつ飛んでくるか分からぬから楽しいんだ』つい。

なんて言っていたから、私も母さんもそつ脱けになつた。

(うん、何度ずぶ濡れになつたことか……)

\*

「到着！」

「つるせえ」

「あいた」

遊園地に着いて、声を張り上げると柊さんに叩かれた。なにげに力が強く、結構痛かつた。

後頭部を押さえながら、鞄のチャックを少しだけ開けると、そこからモモちゃんが頭だけをひょっこりと出して、辺りを見回す。可愛いな。そして、私と目が合つとにゅ～と鳴き、また中に引っ込んだ。

「モモつてさ、オレ達の言葉分かつてるよな？」

「うん。そうとしか思えないよね？」

「世の中面白い猫つてのはいるもんだな」

「そうね……大人しいし、意思をハッキリ表現するものね」

母さんの言葉に、昨日風呂上がりに頭に飛び乗ってきてすぐに降りたモモちゃんを思い出す。華ちゃんの言つたとおり、濡れていたからだろ？。

今の所、私が知つてゐるモモちゃんの意思表示は、これど、もつ一つは昨日の朝にモモちゃんを降りたとした時。降りるのを明らかに嫌がっていた。

「ほら、モモについての考察は後にして、早く中に入らん？。」

柊さんに言われて、私たちは入場券を買ひ中に入った。休日と言つこと也有つてか、やはり中は外よりも多くに盛り上がつていた。懐かしい感覚に浸つていると不意に右手首を握られて、見るとそれは修くんの手だった。面倒をお掛けします。

それを見て、母さんが若こいつて良いわね……なんて言つていたけど、母さんも十分若いと思う。とりあえず、絶叫系を先に済ませようと柊さんが言つて、私たち3ジエットコースターから乗ることにして、その後も色々乗りまくった。

で、その結果

「……」

修くんが限界を迎えるました。

「だらしねえな……あれくらいでダウンしやがつて」

「お前な！ あれで、ダウンしない方がおかしいだろー。なんだよあれ！ 一回機体が宙に浮いたぞー。」

「それくらいで一々騒ぐなよ」

「『ハーフリース』で片付けられるか！　もし落ちたらどうすんだ！」  
「落ちる訳ねえだろ？　ちゃんと計算とかされての設計なんだから  
れ」

(うん、確かに)

「どうか適当にあんな物を作られたら、その遊園地は信用を一氣  
に失うと思つ。」

「言こと合つている修くんと柊さんはどうあえず置いておいて、

「お皿代りあるへ。」

私は華ちゃんと母さんに聞いた。

今、関係ない」とだけど、この一人並んでると姉妹に見える。

「ハンバーガーか何かで良いんじゃない？　この後に乗るのは、そ  
んな叫ぶ物じゃないし、少し重い物食べても大丈夫でしょ？」

「そうだね。華ちゃんもそれでいい？」

「いい」

「という訳で、お皿はハンバーガーに決定した。ナゾ、修くんと柊  
さんがまだ言い合っていたから、私たちはベンチに座つて終わるの  
を待つことにした。」

「空が青いわね～」

\*

昼食を済ませてからは、メリー「カクテル」や「ヒーラー」カップと書いた大人しい乗り物に乗って遊んだ。陽が傾いて来た所で、最後の占めに観覧車に乗ることにして、私と修くん、母さんと華ちゃんと柊さんで分かれて乗った。

「楽しかったね」

「ああ。……昨日の夜さ」

答えた修くんが急に話題を変えた。

「柊が下に来たんだ」

「え、そうなの？」

「ああ、なんか眠れなかつたらしい。それで、テレビを見ながらお前のことどう思つてるかつて聞いたんだ。……なんて言つたと思ひ？」

「えへ……柊さんでしょ？ うへん……生意氣？」

言つと修くんは、自覚してたんだな、と笑いながら言つて答えを教えてくれた。

「『『子供っぽい』』ってさ」

「え？」

「意外か？」

「うん……もつとむかつく」と言われるかと思つた

「はは。なんかさ、自分が言つたことに一々突つ掛かつてくる所とかが、そう思つんだとさ」

(そんなの向こうだつて回じじゃん)

そう思つたのが、なんとなく分かつたのか、修くんはまた笑つた。

「似たもの同士だって、海野が言つてただろ？」

「うん。不本意だけど」

「向こうもそう言つてたよな？ でもさ、本心は分からないだろ？ 今はそう思つても、いつかは一人とも素直にそう思つ様になるんじゃねえか？」

「ならないと思つけど」

「まあ、いいじゃねえか。そんでき、そつ言つた時、あいつ笑つてたんだよ。無意識かどうか知らねえけど。だから、本心ではお前のこと、嫌つではないんだろうな……それに、少しでも嫌つたら、昨日の時点で家に帰つてるだろ？」

やつ言わると、確かに、つて思つ。

「…………」

「オレ達さ、昨日会つたばかりだり？ それなのに、今はこんなに近くにいる」

「あ、そつか」

「これも、終と話したことだけど……面白いよな？」

「…………そうだね」

外を見ながら言つた修くんの言葉に、私も外を見て答えた。

私たちを乗せた観覧車は、その後もゆっくりと廻つていた。

## 方向音痴少女の担任とクラス委員

「改めまして、私は百合河菊です」

「オレは千同修輔。まあ、よろしく」

そう自己紹介すると、クラスからパラパラと拍手が上がった。その中には華ちゃんもいたから嬉しかった。

「ほんとに良かったよ……初日から何か事故に遭つたりしたんじゃないかって心配してたんだから」

そう言つたのは、私たちの担任である、湯前杏先生。ゆのまへあなず 華ちゃんの言つていた通り、黒いスースを着ている。

髪は、灰色？ そんな感じの色だけど、艶があつて綺麗だ。瞳は朱と蒼のオッドアイで、どちらの瞳も綺麗で、とても優しい色をしている。

それと、朝、謝りに行つた時は一人まとめて抱きつかれて、泣いていた。それだけ本気で心配してくれていたんだろうな・・・制服が少し濡れちゃつたけど、そこは気にしない方向で行こうと思つ。

「すいませんでした」

「いいの。何も無くて、本当に良かった」

「この人は、教師が天職かも知れない。」

「さて、自己紹介も済んだ所で席に着いてくれるかな？」

「あ、はい。行こうか？」

「おひ」

教壇から降りて、机に向かおうとするとき、

「お?」

手を握られた。

見ると、それはやつぱり修くんだった。

「千回くん。いくら菊でも、教室で迷子にはならない

私が言おうとしたことを、やつぱりそのまま華ちゃんが言つてくれた。

「ああ、いや……なんか、無意識に」

「はは。まあ、仕方ないかもね?」

そう笑いながら、私と修くんは席に着いた。先生が今日の連絡事項を話している間、何か視線を感じた。

(なんだろう? まあ、いいや)

HRが終わり先生が出て行くと、華ちゃんが私たちの所に来た。

「二人は、部活見学どうするの?」

今日は、学校が始まったばかりだから午前中は普通に授業があるけど、午後はレクリエーションで各自部活見学することになつている。

その質問に答えようとしたら、何人かの女子生徒が私たちの方を見ていた。男子生徒も少数だけど、同じように見ている。

「どうした？」

「ん？　あ、ううん、なんでもない。部活のことだけ、私は適当にブラブラするだけで、どこにも入るつもりはないよ？　修くんもだよね？」

「ああ。授業が終わってまで学校にいる意味が分からんしな」

「はは。華ちゃんは？」

「わたしは文芸部に入る。姉さんしかいないから、今年誰も入らなかつたら廃部になってしまう」

文芸部か……華ちゃんにはピッタリな気がする。でも、柊さんが文芸部と言つのは意外だ。

（多分だけど……華ちゃんの為に創ったのかな？　華ちゃんのこと、本当に可愛いみたいだし）

兄妹がいない私としては、少し羨ましい。

「あいつしかいない、つて……」の学校、結構な人数がいるじゃねえか」「

兄妹欲しいな……と思つてると修くんがそつと言つた。

華ちゃんが答えようとした時、チャイムが鳴つて同時に杏先生が入ってきた。席を立つていた人達はみんな席に戻る。勿論、華ちゃんも。

クラス委員の号令で挨拶をして早速授業に入る。

担任を持っているからだわ。自己紹介はもう一度名前を言つだけで終わった。

先生の担当科目は数学全般。高校の授業は難しいと思っていたけど、先生の教え方はわかりやすくて、字も丁寧だから見やすかった。

でも、

「気に入らねえな？」

そう。

気に入らない。

「それじゃあ、この問題を……」

先生が誰かに当てようつと振り向くと、皆一斉に目を反らしたり、顔を下げたりした。さっきまでは、食い入る様に見ていた癖に。顔を上げていて、目を反らしていくのは、私含め四人だけだった。

私と修くんと華ちゃん。そして、クラス委員をしている背の高い女子生徒。

先生は力ない声で、じゃあ、海野さん、と華ちゃんを指名した。

「はい」

返事をして、黒板に向かい問題を解いていく。

「できました」

「……うん、正解。バツチリよ」

笑顔で言つて、先生は華ちゃんの頭を撫でた。小学校みたいだな、と思つたけど、じついうのも良いなとも思つた。

ありがとうございます、と言つて華ちゃんは席に戻つた。

私と修くんは、見合つて頬笑み、クラス委員の人もうんうんと頷いていた。

その後も、先生が当てようとする度に同じことが起こって、私たちが手を挙げて問題を全部片付け、四つの問題が出された時に、クラス委員の人が問題を解きながら自己紹介してくれた。

「私は椎名沙織。よろしくな?」

「うん。よろしく、さつちゃん」

「……さつちゃん? それは、私のことか?」

「え? うん、『沙織』だから『さつちゃん』。馴染かな?」

修くんは、何故かため息をついていて、華ちゃんはとっくに問題を解き終わっている。でも、席には戻っていない。

「さつちゃんか……そんな風に呼ばれたのは初めてだな。いいだろう、是非ともそう呼んでくれ」

「うん。あ、私のことは『菊』でいいから。で、いつまは『修くん』

「はー、おー、止めよう。修くん、なんて呼ぶのはここつだけで十分だからな?」

「心配せずとも、一人の間に入るつもりはないわ」

さつちゃんは、そう言って問題を解き席に戻った。その後を追つて華ちゃんも席に戻り、教壇には私と修くんと杏先生が残った。

授業を長引かせる訳にもいかないから、問題を解いて先生に確認して貰うと、華ちゃんと同じように頭を撫でてくれた。どこかくすぐったくて、でも心地よかつた。

モモちゃんも、撫でられた時はこんな感じなのかな?

席に戻ると同時にチャイムが鳴り、高校最初の授業は終わり、先生が教室を出て行く時、手を振ると少し恥ずかしそうにしながらも振り返してくれたから嬉しかった。

窓を開けて桟に腰掛けると同時に華ちゃんがやつてきて、後ろからさつちゃんも来た。修くんは私の椅子の背もたれを抱え込むようにして座っている。

「いきなりだが、入学式の時はどうして来なかつたんだ?」「ホントにいきなりだな……まあ、オレは田にちを一日勘違いしてたんだ」

「で、道に迷つた私が道を聞こいつと何軒か立ち寄つた所で、修くんの家に着いて、そのまま一緒に來たんだけど結局間に合わなかつたの」

「ふむ……千同の方は分かつたが、菊はどうして迷つたのだ?」「方向音痴なもので」

「……成る程?」

疑問系でさつちゃんは言つた。

「三人は、知り合いの様だが?」

氣を取り直して、と言つた感じで聞かれて、私達は交代しながら事情を話した。家に泊まつたことや遊園地に行つたことも含めて。柊さんことを言つた時に、何か驚いていたけど、何だつたんだろう?

う?

昼休み。

私と華ちゃんとさつちゃんはお弁当を持つてきているけど、修くんは学食だと言つるので、教室で待つことにした。少し話しきしていると、携帯が鳴つて見ると「修くん」の三文字が出ていた。

「千同くん?」「

「うん。なんだろう……もしもし?」

『ねむ』

「…………」

何も言わずに切った。

「千回じゃないのか?」

「うん、間違い電話だった」

と、また携帯が鳴り見ると、今度は「柊さん」の三文字が出ていた。

『お前! 無視すんなよ!』

「お掛けになつた電話番号は現在使われていないか、柊さんからの着信を拒否しておつます」

『面白こと」と言ひやねえか……まあいい。今千回と学食にいるから、お前よりも弁当持つてこい』

いいな、と黙つて一方的に通話を切られた。

「はあ……」

「どうした?」

「柊さんが学食にこつてしまふ」

「柊って、あの柊か?」

「どの柊かは分からぬいけど、『柊』とは違いないよ。修くんもいるつて……私たちほ行くけど、れつかやんせ?」

携帯を置んでポケットにしまって、立ちながら聞くと、

「……行く」

と、暫く考え込んで言ひ、立ち上がつた。

## 方向音痴少女の昼食

「お、思つてたより早かつたな？」

「華ちゃんに引つ張つて貰つたからね」

学食付くと、奥の一角が妙に人がいなくて見てみるとそこに修くんと柊さんの一人がいた。周りの人達は、チラチラといつも見ていた、杏先生の時と同じ気持ちになつた。

「ん？ そいつは？」

私と華ちゃんの後ろに立つさつちゃんを見て、柊さんが聞いた。

「修くんから聞いてない？ 私達のクラスのクラス委員で、さつちゃん

「……またか？」

「ああ、まだだ」

何が「また」なのか、分からぬけど、まあ、いいや。席に着いた所で華ちゃんは手を離して、さつちゃんも、どこか緊張している様な面持ちで隣に座つた。学食にあるテーブルは丸テーブルと長机の一つがあつて、私たちが座つてるのは五人掛けの丸テーブル。

私から時計回りに、さつちゃん、柊さん、修くん、華ちゃんで座つている。

「それで？ なんで、呼んだの？」

「あ？ 飯食う為に決まつてんだる？」

「別にこじりや無くても良かつたんじやない？ 私たちか柊さんが

教室に行くが来るかすれば良かつたじゃん」

「やつすると、ちと面倒でな。お前は……やつちゃんだっけ？あたしのこと知ってるみたいだな？」

「え？ あ…………」

「正直に言え」

「……知ります」

柊さんに言われて、さつちゃんは俯きながら答えた。どうやら、さつちゃんの言っていた「あの柊」は「柊さん」のことだったみたいだ。

それはおことこで、

「お腹空いた」

修くんを待っていた分と、ここに来た分で余計に。

「あ、オレまだ何も買ってねえ」

「ついでにあたしの分も買って来てくれ

そういうで、五百円硬貨を修くんに投げ渡す柊さん。修くんも受け取りながら何がいい、と聞き、柊さんは何でもいいと答える。

おう、と答えて券売機に向かう修くんを周りの人はまた見ていた。  
「（こいや、もう。気にする方がおかしいんだし）で、柊さんって学校で何かしたの？ さつきから、こっち見てる人が多いけど」「ん？ ああ、いや。単に喧嘩とかしまくってな、いつの間にかヤンキー共を全滅させてたんだよ。で、この髪にちなんで、『赤鬼』とか言われる様になつたんだ」

柊さんは、髪を弄りながらそう言った。

「…………なんだ、それだけか。修くん遅いなあ…………あ、そつだ、そつちゃん、メアド交換しない?」

「え? あ、ああ、分かつた」

そつちゃんが頷いた時に、柊さんが何か言つたけど、小さくて聞き取れなかつた。何とか、「お前」だけは聞き取れたけど、後は全く。

メアドを交換し終わつて、少し話しおこるといふと修くんが一つのトレイを持って戻つてきた。

「なんでも良いくことだつたんでな……激辛カレーにしてみた」

柊さんの前に置かれたそのカレーは、色が「赤」を通り超して「真つ赤」だつた。しかも、ルーがポコポコ、偶にボロ、と音を立て火山の噴火口みたいになつてゐる。

「おう、サンキュー」

「これが釣り銭な?」

言つて柊さんに投げる、修くん。三枚程あつたにも関わらず、それは途中で分かることも無く綺麗に柊さんの手に收まつた。

(何ぞの無黙に良いコントロール)

修くんが買つたのは、醤油ラーメン。

「うし、まあ話しあはにして、今は飯だ」

柊さんのその言葉に、私と華ちゃんもお弁当の包みを開ける。

「いただきます」

「「「いただきます」」」

私の後に続いて、三人も手を合わせてそれぞれ食事を始める。その中で、さつちゃんが未だに包みすら開けていなかった。

「どうしたの？」さつちゃん

「ん、腹減ってねえのか？」さつちゃん

「それでも、少しは食べないと後が疲れるさつちゃん」

「そうだぞ？」一口食べれば、後は自然と箸が動くぞ、ほり、さつちゃんと食えさつちゃん」

「……何故全員最後に『さつちゃん』と付ける?」

『なんとなくさつちゃん』

「なぜだと？」

四人同時に頷く。

ちなみに順番は、上から私、修くん、華ちゃん、柊さん、さつちゃん。

「はあ……何か、変に緊張していた私が馬鹿みたいだ」

ため息をついて言いながら、やつとさつちゃんもお弁当の包みを開け始めた。

「緊張つて、なんで緊張してたの？」

「『赤鬼』の噂は中学からあつたからな……見たことはあつても話したことは無かつたんだ。だから、どんな人なのが全く知らなくて、変なイメージだけが付いてしまつたんだ」

「どんなイメージか知らないけど、柊さんは柊さんだよ。偶にむかつくけど」

田曜田も、私と柊さんの一人で、ギャーギャー騒いでいて、華ちゃんに

『「うるさい』

と一言で黙りされた。

(まあ、ちよつとしたことで喧嘩になつてゐただけなんだけ  
ど)

「お前だって、一々騒ぐだらうが  
「ええ、それが何か?」  
「無いチチ」

プチと、何かが私の中で切れた。

「なによ...」  
「やるか!」

手をテーブルに叩きつけて立ち上ると、柊さんも同じように立  
ち上がる。

「お前の今の沸点の低さは、なんなんだ?」

修くんが何か言っていたけど、私たちは昨日の様に騒いでいたから何も聞こえなかった。

「二人とも、いい加減にしないと怒る」

「「すいませんでした」

ピッタリ揃つて私と柊さんは華ちゃんに頭を下げた。

それを見てか、さつちゃんが笑っていた。

(まあ、良かったかな?)

その後は、普通に賑やかにお昼を食べて、屋上に向かつた。立ち入り禁止の看板があつたけど、それを無視して上がり、何故か鍵を開いていた屋上に出る。さつちゃんは最後まで、抵抗していたけど柊さんに引っ張られて強制的に入らされた。

「うわやつて見ると、結構な高さを感じるよな?」

誰にとも無く、修くんは下を見て言った。

私はもう少し高い所から見よつと思つて、貯水タンクがある所に登つてみた。

すると、

「.....」

人が寝ていた。

水色のツンツン頭の男子生徒が。

「.....んあ?」

私が登ってきた音が、人の気配で目を覚ましたのか、変な声を出して目を開けた。でも、一瞬だけ私を見て、またすぐに眠った。

(寝付きが良いことで)

## 方向音痴少女の春から夏

学校が始まって一ヶ月が経過した。とは言つても、あまり変化はない。

学校にいる間も相変わらず修くんか華ちゃんかさつちゃんに手を引かれて移動しているし、お昼は柊さんと少しケンカしそうになると、華ちゃんに一言で黙らせられる。

それを見て、修くんとさつちゃんが笑う。

変化はないと言つたけど、一つだけ……杏先生がお昼と一緒に食べるようになつた。だから、学食丸テーブルじゃ少し窮屈になつてしまい、先生がいる一緒にお昼を食べることができる日だけは屋上で食べることにした。その度に私は貯水タンクの所を見てみる。大体、週に四回ほどどの確率でそこにはシンシン君が寝ていて、今日も絶賛睡眠中だつた。

(「ほんはちやんと食べているんだろうか?」)

修くん達に言つても、寝てるんだから放つておけ、と言われたので、私はまず確認をしてそれからは放つておくことにしている。毎度気持ちよさそうに寝ているからね。

先生は初めは屋上に行くことを、さつちゃん同様抵抗があつたけど、またも柊さんが無理矢理連れて行つた。

ちなみに、私たちはみんな文芸部に入り、顧問は杏先生が引き受けてくれた。

授業が終わつたら、部室に行つて適当に本を読んだりギャーギャー騒ぎながら過ごしている。部活中だからか、華ちゃんもこの時は何も言わない。偶に修くんが巻き込まれているけど、さつちゃんがなんとかしているから、問題なし。先生はそんな私たちを頬笑みながら見ている。

そして最後は、散らかった部屋を私と柊さんが片付けて終ったところ。

途中まで、修くんに手を引っ張られて帰り、別れてから家に帰ると柊さんが出迎えてくれると同時にモモカリちゃんが頭に飛び乗ってくれる。

お風呂に入つて、「はんこを食べてテレビを見たり、その日にあつたことを話したりして過ごし寝る前に華ちゃんやさちちゃん、杏先生、鶴に柊さんとメールか電話をする。修くんはあんまりしてこないけど、ひつちが送るとちゃんと返してくれる。

それが、最近の私の日常。大きなイベントがあつたりする訳じゃないけど、とても楽しい。

\*

「おはよー、修くん」

「おはー。流石に一ヶ月も経つと、学校までは迷わずこなれるな?」

「菊は毎日進化してる」

「なるほど。常に成長しているのか…………すげいな、菊はー。」

「うわー私はもうここにいる。窓を開けてこいつの様に机に腰掛けようと、いつも私が最近学校である噂が立つてることを教えてくれた。

その噂の内容が

「「私（俺）と修くん（丘田三）が付き合つてゐる。」」

と言つものだった。

でも、

「「それが?」」

何の問題もないと思つ。

「なんだ、否定しないのか?」

「う~ん……だつて、傍から見たりさ、いつも私は誰かと手を繋いでいる訳で、その中で異性は修くんだけなんだから」

「ああ、やつ見えるのは寧ろ当然じゃねえか?」

「といつよつ、一ヶ月も経つてやつと つて言つのが、わたしたちの感想」

「やうそつ。それに、柊さんがからかつてくる」ともないつてことは、あの人からしても取るに足らない噂だつてことだよ」

あの人なら、面白そなことがあつたら、絶対私たち、特に私を巻き込もうとするだらうじ。学校どころかメールや電話ですらそれがないんだから。

「ていうか、何でそんなつまらない噂が流れてるの? もつと、面白いこととかあると思うけど?」

「だよな……オレ等のことと噂して何が楽しいんだか」

「コソコソと噂をして、その反応を見て楽しんでいるだけ。下らないことだから、なんにせよ気にする必要はない」

「ふむ………言われて見れば確かに。済まなかつたな? 変なことを言つて」

「いいのここの。やつちゃんに何か責任がある訳じゃないし」

その後は、いつも通り他愛のない話をしてチャイムが鳴るまで過ごした。先生が入ってきて、挨拶をした後連絡事項を伝えて、出て

行く時に私たちに手招きした。修くん、華ちゃん、さつちゃんも一緒に後に付いて行つて、階段の所で先生が止まつて私たちに先生は言つた。

「菊ちゃんと修輔くん、最近何か変化があつたりしない？」

「変化……ですか？　いえ、特に何も、ねえ？」

「ああ。……もしかして、噂のことか？」

先生は頷いた。

「それに付いては、私たちは気にしてませんよ？」

「ホント？　誰かに何か言われたりとか、してない？」

「大丈夫ですよ。仮に何か言つてきたとしても無視しますから」

「…………そうね。でも、何か言つたらすぐ元に戻つてね？」

「はい」

まだ少し心配そうな顔をしながら、先生は職員室に戻つた。それを見送つて、私たちも教室に戻ろうとして、

「いじりちだ」

また修くんに首根っこ掘まれて引きずられた。

\*

「そろそろ衣替えの季節ね？」

ソファに座つてゐる私と母さんの間で丸くなつてゐるモモちゃん

の背をなでながら、母さんが言った。今日は日曜日、特にすみじと  
もないから、家でゆっくりしている。

「そうだねえ…………体育の時は汗が辛いよ」

「そうね。でも、いいじゃない。それだけ運動してるのでし  
ょ?」

「うん」

そう答えた所で、チャイムが鳴り誰かの来訪を告げた。

「私が出るよ

「お願ひね」

は～い、と返事をして玄関に向かい、はいは～い、と言いながら  
開けると太陽の光が入ってきて、その眩しさに一瞬目が眩んだ。

もう一度、目を開くと

「「よひ」「ひよ」

「や～。一日振りだな?」

「おはよう

「休日に会うのは初めてね?」

修くん達がいた。

「どうして急に」とか「来るなら連絡して」とか、言おうと思つた  
けど私の口から出たのは、

「いらっしゃい。みんな」

その一言だった。

「いやー

頭の上ではモモちゃんも歓迎するよ! ひー鳴いた。

もうすぐ夏の到来だ。

方向音痴少女の春から夏（後書き）

指摘・批判等お待ちしております。

## 方向音痴少女のお姉さん

「菊ちゃんの担任の、『湯前杏』と言います  
「私はクラス委員を務めている『椎名沙織』です。菊からは『わつ  
ちゃん』と呼ばれています」

「うーん。わたしは菊の母親の『丘合川桜』です」

母さんが挨拶をした時、以前の修くん達の様に一人も驚いた。後で聞くと妹だと思つたらしけど、まあ……無理もないかな、とは思つ。

母さん達が挨拶している、その間の短い時間で柊さんは勝手知つたるなんとやらと書つた様子で冷蔵庫からお茶を取り出して飲んでいた。修くんはそろそろ昼食の時間だからなのか、材料を漁つて何か作ろうとしている。隣には華ちゃんとモモちゃんも。

(ホントいつの間に移動してるんだら?)

全く気付けない。

「優しい人ね……」

「ですね。所で、あいつらはかなり好き勝手動いてるが……いいのか?」

「うん。私も母さんも慣れてるから」

始業式の日以来よく来るようになつて、すっかり馴染み「はんを作るのは修くんも自然と手伝つようになつたし、華ちゃんと柊さんは泊まることも多くなつた。シャンプーなんかは、自分の家から持ってきてくるみたいで、母さんが遠慮せずに家のを使って良い、と

言つても何故かそこだけは譲らなかつた。

「やうなのか……それにしても……」

台所の方を見たさつちゃんに続いて、私も台所の方を見てみると、そこでは母さん達が仲良く昼食作りをしていた。柊さんは今度はアイスを食べるつもりなのか冷凍庫を開けていて、母さんにお昼を食べてからにしなさい、と怒られていた。

「馴染み過ぎじゃないか?」

「楽しいよ? 気を遣うこととか全くないから。さつちゃんも先生も、好きな時に来てね?」

「…………ああ」

「あたしは、あまり来れないか知れないけど……その時はよろしくね?」

「もちろんです」

それから、三人でテレビを見ていると暇になつたのか柊さんもこつちに來た。私の隣に無理矢理座つて、

「今日はオムライスだつてわ」

と言つた。

「それは良いけど、なんでわざわざ隣に来るかな? そつち、空いてるでしょ?」

家のソファは長いソファと、短いソファが一つずつあつて、長い方には三人は余裕ではいるけど四人は少し窮屈だ。

「良いだろ別に…………嫌なのか？」

「そんな訳無いでしょ？ ていうか、今更そんなこと聞く？」

「…………」

「柊ちゃん？ 嬉しいなら素直に言つた方が良いわよ？」

「そうだな」

先生が優しい笑顔で言つて、さつちゃんも腕を組みながらうんうんと頷いていた。何か嬉しいことがあったのかどうかは分からぬけど、柊さんを見ると顔を背けていて、心なしか耳が赤くなつていた。

「暑いの？ 温度下げる？」

そう聞くと、柊さんはいや、と顔を背けたままで答えた。

「「鈍いな（わね）」」

「え？ 誰が？」

「加えて無自覚」

「まあ、女子だからな……許容範囲ではあるだろ？ 男だった単なるむかつくなつ奴で終わるが」

「それもそうね」

聞いても答えてくれず、その後も一人で何のことか分からぬけど話しかけていた。テレビに視線を戻して、適当にチャンネルを変えていると昔見ていた子ども向けの番組があった。こんな時間にあるのは再放送だからだろ？

途中で柊さんの方を見てみると、いつもの柊さんに戻っていた。

暫くして昼食が完成し、テーブルでは取まらないからテレビの方

にみんなで座つて食べた。いつもと味が違つて、聞いてみると華ちゃんが作ったそつで、美味しいと言つと嬉しかったのか顔が赤くなつていた。

「後でお買い物行くけど、みんなまだいるね。」

食器を柊さんと分けて纏めていると、母さんがみんなに聞いた。  
片付けの手を止めずに私も柊さんもおついて行く、と返事をし、修くん達も行くと言つたから、三時頃にみんなで買い物に行くことになつた。

「いやー

「わらわ、モモちゃんも一緒に。

「テレビを見たりトランプをしたり、学校の話をしたりしながら過一じて、一時半を過ぎた所で、

「少し早いけど、行きましょうか」

買い物へ行くことに。

迷子になつた時の為に携帯を取つてくるよう言われて、取つてきてから、モモちゃんを抱いて外に出で、鍵を掛ける。

「お待たせ」

差し出された修くんの手を取つて、みんなと一緒に商店街へ……  
行つたのはいいんだけど、

「迷った」

途中、修くんの携帯に着信が入つて話している間に少しフリフリへ  
として、気付くとみんなとはぐれていた。モモちゃんも、途中で華  
ちゃんが抱っこしてたから、いない。

「ていうか、誰も気付かな<sup>い</sup>つてどうなんだろう? それに携帯も  
……そりゃ掛かってこないよねえ~」

ポケットから携帯を取り出して開くと、電源が入つてなかつた。

(寝惚けて切つたりしたのかな?)

なんて思いながら電源を入れようとしていると、視界に一瞬水色  
が入つた。それ自体は、別に気にすることでもないんだけど、どこ  
かで見たような気がして振り向くと、水色ツンツン頭の人がいた。  
屋上で寝ていた人かどうかは分からぬけど、多分そうだと思う。

「と……連絡しないと」

電源を入れて、着信履歴を見ると修くんから十回くらい掛け合  
った。で、じつちから電話しようとすると、じぶんは柊さんから掛  
かってきた。

「もしもし?」

『やつと繋がつたか……たく、今どじだ?』

「え? えつとね……本屋さんの前」

『分かつた。そこ動くなよ? 今から行くから』

「はーい」

返事をすると、最後に柊さんが何か言つた氣がしたけど聞く前に切られた。

(なんて言つたんだら?)

『気にはなつたけど、とつあえず待つことにした。』

十分ほど待つていると、モモちゃんを抱っこしていの柊さんが来た。腕の中で眠っているモモちゃんがとても可愛かった。

「たく、お前は……つかつかあるなつての」

「あいた」

ビシ、と頭に軽めのチョップを入れられた。

「はあ……」

そして、そのまま頭を撫でられた。

「あまり、心配を掛けるなよ?」

「…………」「めんなさい」

困ったような笑顔で言われて、そんな表情を向かうられたことの無かつた私は、戸惑いながら謝った。

「行くぞ?」「うん

差し出された手を握つて、一緒にみんなの所へ戻る。

繋いだ柊さんは手はとても温かかった。

\*

「そう言えれば、もうすぐ期末テストよね？ みんな、勉強は大丈夫？」

夕食の席で言われた、母さんのその言葉に私と修くんの動きが止まつた。私は苦手な世界史以外ならなんとかなるけど、世界史は本当に苦手だから結構危ない。修くんは、授業中いつも寝ているからどの教科も結構危ない。

「危ないことに変わりは無いわね」

（全く以てその通りです）

「ならば、テスト前は放課後を使って勉強するか？ 期間中は部活も無いからな」

「そうね。あたしも、少しなら数学以外でも教えることができるから……しましょうか」

「わたしは構わない」

柊さんは何も言わないけど、どうやら決定事項らしい。

「「はあ……」「

こうして、テスト前に勉強会が開かれることが決まった。

(まあ、頑張ってみよう)

方向音痴少女のお姉さん（後書き）

指摘・批判お待ちしております

## 方向音痴少女の期末対策

「暑い」

「そうね……」

私が言つと、先生が同意した。今は放課後で、一週間後に迫つた期末テストの対策をいつものみんなでやることになつたんだけど、まだ私と先生しかいない。早く来ないものか……。

今の先生の格好は、白い半袖シャツに黒のミニスカートと言つ、いかにも夏ですという格好だけど、それでもやはり暑い物は暑いらしい。かく言う私達生徒も、夏服に衣替えしたけど、だからと言つて暑さが大幅に減少される訳でもない。

夏服は、まあ多分他の学校と同じような薄いカッターシャツと少し布が薄くなつたスカート。男子も同様で、違いは下がズボンと言うことだけ。

「職員室は涼しいですか？」

「涼しいのは涼しいんだけど……偶に寒いのよね」

「あ、分かりますそれ。でも、切ると暑いんですね」

「そうなのよ……それに、一歩外に出るとその差がまた激しくて」

動く気が無くなりますよね~、と言つと、先生はまた同意した。家の中でも、冷房が効いていると外には出たくないなる。効き過ぎてると、外に出た途端ふらつくこともある。

「あ、そうだ……菊ちゃん、あの屋上の生徒のことは、覚えてる?」

「え? あ、はい。もちろん」

「どうか、忘れる訳が無いと想う。屋上で『はんを食べる様になつてからは、いつも見ていたし、寝る態勢もいつも殆ど変わらない。凄いよね。』

「あの人があなたがどうかしたんですか?」

「私は詳しく知らないんだけど……あの子、柊けやんと同じような存在らしいの」

「てことは、『青鬼』とか呼ばれてるんですか?」

柊さんは赤鬼だからそう思つたけど、呼び名などに關しては分からぬらしい。どうして、その人のことが話題に出たかと言つと、今日先生が三年の授業をしに行つて、授業中その人ことを話しているのが聞こえたらしい。

街の不良を壊滅させたとか、一人で二十人を相手にしたとか……そういうかにもな噂が三年の間では流れているみたいだ。

「じゃあ、授業にも出てないんですかね?」

「多分そうだと思うわ。いつも空いている席があつたから……」

「遅くなつて悪い……って、まだ一人だけか?」

「あ、修くん。やつほー」

教室後ろのドアが開いて、修くんが謝りながら入ってきた。手をひらひらと振つてそつまつと、修くんも軽く手を振つていつもの席に着いた。

「何してたの?」

「小腹が減つて学食でパン買つてきたんだが、思いの外多くてな。

時間掛かつちまつた」

「あんまり食べ過ぎないよ!」

「ういーっス」

先生の注意に適当な返事で返して、机から教科書とノートを取り出した。当初の目的を忘れてはいなかつたらしい。とりあえず、私たちだけ先に始めておくことにして、私と修くんと先生が座つている三つの机をくつつけた。

暫くして、今度は華ちゃんとさちちゃんが一緒に来た。図書室で本を探していたらしい。柊さんは、もう少ししたら来るとのこと。

「しかし、暑いな……」

そう言つて、さちちゃんはシャツの第一ボタンを外して下敷きで扇ぎ始めた。修くんもいるけど、大して気にしていないらしく。

(单なる慣れなのか、異性として意識していないのか)

「教室にもクーラーが付けばいいのにね?」

「だよな?……」

(修くんも大して気にしないみたいだけど)

華ちゃんは黙々と勉強をしていて、分からぬ所は先生に聞いて教えて貰つている。そして、すぐに理解して問題を解き、その度に先生は華ちゃんの頭を撫でた。

前に聞いたけど、これはビーナラ癖の様なものらしい。気付いたら、そういうようになつていたとか……。

その話が終わって、数分程してから柊さんがやつて來た。何も持

つてきていなかから、多分勉強する気は無いな。まあ、本人曰く「勉強しなくても点は取れる」らしいし、中間テストも無事クリアしてから、そんなんだろ?。

華ちゃんに聞くと、昔から勉強は出来ていたらしい。

(はつあつ言ひて信じられなかつたな……)

でも、事実な訳で、

「ん? おい、そこ間違つてるだ?」

こんな風に少し見ただけで間違いを指摘する「」ことが出来る。

「どこ?」

聞き返すと、わざわざ移動してきて教えてくれた。ついでに解き方も……これがまた分かり易いんだよね。

「柊さんってや……教える時だけは『先輩』って感じだよね?」「だけ、は余計だ。他に分からぬ所とかあるか?」

「えつと……ない。ありがとな?」

「ああ」

短く返事をして、わざ今まで座っていた席に戻る柊さん。そして携帯を弄り始める。

「教師がいるの?」「よくもまあ堂々と」「クラス委員もいるだ?」「今更だろ?」

修くんとモモちゃんの言葉にどうでも良い、と喜び様に答えて、用事が済んだのか携帯を閉じてポケットにしまった。

「柊ちゃん、勉強は大丈夫なの？」

「ああ。大体のことは聞いていれば覚えるからな」

それがまた本当だからね……。

五時を回った所で勉強道具を片付け、窓を締めて鍵をかける。確認をしてからみんなで教室を出て、修くんに引っ張られて帰路に着き、みんなそれぞれの家に帰り、私も修くんに送つてもうって家に帰つた。

「ありがとうございます。それじゃ、また明日ね？」

「おう。お袋さんによろしくな？」

「うん」

手を振つて、修くんが見えなくなるまで背中を見送つてから家に入ると、聞こえていたのかモモちゃんがいて、すぐに私の頭に飛び乗ってきた。

夏になつても、頭にのるのは変わらない。

リビングでは、母さんが鼻唄混じりに料理をしていた。ただいま、と声をとおかえり、と帰つてくる。

「着替えてくるね？」

「ええ。あ、その前にお風呂の準備お願い

「分かった。モモちゃん、少し待つてね？」

「ええ。あ、その前にお風呂の準備お願い

「分かった。モモちゃん、少し待つてね？」

「」いやひー。

返事をして、頭から飛び降りるモモちゃん。それを確認して、私はお風呂に向かい、お湯張りを始めて蓋を閉めた。一階の部屋に行つて着替えて下に戻ると、またモモちゃんが飛び乗ってきた。一緒にソファで寛ぐ。

「もうすぐ期末テストでしょ？ 勉強の方は大丈夫？」  
「うん。先生も終さんも、教え方が分かりやすいから」「そう、良かったわね？」  
「うん」

それから、母さんも一緒に寛いで、七時頃に夕飯を食べて、お風呂に入った。

十時頃になつて、そろそろ寝ることにして母さんにお休みと言つて部屋に戻る。モモちゃんは、母さんが寝る時に私の部屋の前に連れてくる、と言つのがいつのまにか定着していたから、問題なし。

期末テストが終われば、すぐに夏休みが来る。

(楽しみだな……)

## 方向音痴少女の夏休みの始まり

あれから一週間が経ち、期末テストが始まった。初日は現国・数学・世界史・科学の四教科が実施され、さつき一時限目の数学が終わった。私は、柊さんに教えて貰った分もあって、結構すんなり解くことが出来た。

修くんは、隣で突っ伏している。もしかしたら危ないかも知れない……と観察していると、華ちゃんときちんが世界史の教科書を持ってやって來た。突っ伏している修くんの背中をきちゃんがバシンと景気の良い音を響かせて叩き、どこか遠くへ行こうとしていた修くんをこつちに戻して四人で確認を始める。分からぬ所や、少し忘れた所をなんとか詰め込んで、世界史のテストが始まり、空欄は三つほど出来てしまつたけど、なんとか切り抜けた。

隣を見てみると、修くんは今度は突っ伏していなかつた。そういうえば世界史は得意だと言つていたな……とほんやり思い出す。でも、「次は科学だよ」と、言つとそれを聞いた途端、ガン！と大きな音を立てて頭を机に衝突させ、

「科学なんてなくなつちまえ科学なんてなつくなつちまえ科学なんてなくなつちまえ科学なんてなくまつちまえ科学ぶつぶつ……」

と呪詛の様に呴いている所で、またさつちゃんが景気の良い音を響かせた。

確認と少し問題を出し合つたりして、備え、世界史より空欄は多くなつてしまつたけど、多分大丈夫だと思つ。

その後、すぐに先生が来て「明日も頑張つてください」と言つて、期末テスト初日は終わつた。

「みんな、問題解けた？」

先生の質問にまるで生命力の全てを使い切つた様な状態の修くん以外、私たちは頷いた。

「そう……明日からも頑張るのよ？修輔くんは……不安だけど、なんとかなるでしょーうん」

それは私たちも同感だ。

先生はもう一度「頑張るのよー！」と、手を振りながら言つて元気に戻つていった。それと入れ替わる様に柊さんが来て、修くんを叩いて覚醒させてからみんなで学校を出た。今まで全く触れてなかつたけど、私たちが今のメンバーで校内を歩いていると、道行く生徒がみんな怯えた様な声を出したり、露骨に目をそらしたりしていった。

もちろん今も。

「ソソソソと何か言つている人達もいるけど、私たちの誰一人そんなものは気にせず明日の予習を復習も同時にやりながら、それぞれの家に帰つた。

翌日からのテストも初日同様に過ごして、最終日も無事終りし、

後日帰ってきたテストはどれも平均を上回る点数だった。修くんは、科学が赤点ギリギリだつたけど、なんとかなった。

ちなみに一十九点未満が赤点で、修くんの科学は三十点。

(ホントにギリギリ……)

その後、なんやかんやで終業式も無事終わり、一学期は終わつた。

余談だけど、華ちゃんは学年一位でさつちゃんは学年一位と一人でトップツーを飾り、柊さんは学校全体で三位と言つ結果を出した。

\*

「菊ちゃん……残念だけど、貴女の夏休みは始まる前に終わつているわ」

テストを返却する時、先生が重い口調で言つた。

「え？ それはどういふ……」

何も言わず差し出された答案を受け取り、そつと表に返して点数

の所を見てみると、

「？」

28、と赤い字で書かれていた。

\*

二二

嫌な夢に、ガバリ、と体を勢いよく起こすと上で寝ていたモモちゃんを驚かせてしまい、凄い早さで床にちゃくちした。

「あ、ごめん！モモちゃん。つて！答案！」

モモちゃんに謝り、慌てて机の引き出しを開けて数学の答案を引きずり出し点数を確認する。

「はあ～～……良かつたあ……」

そこには確かに、76と赤い字で書かれていた。

安堵した私はもう一度モモちゃんに謝り、抱きかかえて下に降り

た。

歯磨きと洗顔をし、リビングに入つて母さんと父さんに挨拶をしてソファに座ると、母さんが「さつを悲鳴は何だったの?」と聞いてきた。

「赤点取つた夢を見ちゃつて……」

「ふふ。それで、あんなに悲鳴を上げたの?」

「だつてえ……」

「まあ、確かにね。わたしも偶にあつたわ……懐かしいわね」

言いながら、母さんはオムレツを仕上げて更に移した。モモちゃんを頭に乗せて台所に向かい、手を洗つて、そのオムレツをテーブルに運んで、モモちゃんのこはんを銀皿に出して私たちも朝食を始める。食べ終わつて、片付けをしている時に母さんが後で少し散歩すると言つたので、私とモモちゃんもついて行くことにした。

白いワンピースに着替えて、髪を一つに束ね帽子を被り外に出る  
と暑い陽射しが突き刺さつてきた。

暑いね~、と言しながら母さん、モモちゃんと一緒にゆつぐつと  
歩く。

犬の散歩をしている人や、ジョギングしている人等、すれ違つた  
人達に挨拶をしながら歩いていると向こうから水色シンシンさんが  
歩いてきた。眠いのか、目が閉じられている。

(よく歩けるな……私は絶対すぐ迷うよ)

なんて思ひながら挨拶をすると、

「お～……」

となんとも眠そうな声が返ってきた。

「あれでちやんと田舎地まで着けるのかしらね?」

「大丈夫なんじゃない? 体が覚えてるのかも知れないし(実際ちやんと真っ直ぐ歩いてるからね)」

その後、適当な所で引き返せりふと顔を掛けられ、振り向くと華ちゃんと柊さんがいた。どうやら家に来ようとしていたらしい。そのまま一緒に家まで帰ることにして、途中華ちゃん、元さん、

「似合ひいる」

と言われて、嬉しかった。

「柊さんは何も言つてくれなかつたけど……。

家に着いて、みんなで中に入りますは手洗いうがいをする。夏風邪なんか引きたくないからね。お茶を飲みながら、テレビを見たり課題をやつたりしながら過い」してくると、

「十回達も呼ぶか」

と柊さんが言つて、修くん達を呼び出した。一人はすぐに来るらしきけど、先生は補習を任せているからお向過ぎにならないと来れないらしい。

二十分程経つて、まずは修くんが来て、それから十分程でさつちやんが来た。でも、修くんは遊ぶ気満々で課題を持ってきていたから、柊さんに取りに帰られ、戻ってきた時は汗だくだった。

（別に走つて行く必要は無かつたと思つんだけど……）

お昼頃になつて、母さんが昼食の準備を始めると、修くんと華ちゃんも手伝いに行つた。

「今日は何作るんッスか？」

「夏だから、シンプルにそーめん。だから、ゆづくつしていいわよ？」

「そうススね。あ、器だけ出しておきますよ」

「ありがと」

「いえいえ」

器を出しながら答え、華ちゃんは台ふきを軽く洗い、絞つてからソファの方のテーブルを拭いた。

「ねえ、さつちゃんは料理出来るの？」

「ん？ ああ、少しならな？ 弁当も手作りだし、それくらいは」

「え！ あのお弁当自分で作つてたのー？」

衝撃の事実。

「ああ」

「柊さん……私たちも少しひらい作れる様になつた方が良くない？」

「…………だな」

と言つわけで、夏休み中私と柊さんは料理の練習を始めることに

した。

『いただきまーす』

みんなで合掌して、そーめんを食べ始める。

「みんなは、夏休み予定とかあるの?..」

私がそう聞くとみんなは特になこと答えた。

「まあ、何もしないのも勿体ないからなリ……今日ある夏祭りでも行つてみるか?」

「神社であるやつ?」

「ああ。結構楽しいと思ひそ?..」この面子なら

「確か?」

柊さんの言葉に修くんが同意した。私もそり思つ。

「それじゃあ、夏祭りに行くことに決定ね」

と、今日の予定が決まった所で家のチャイムが鳴った。

「ひたにちは。今日も暑いわね?..

「ひたにちは、先生。ホントですね」

招き入れて、そーめんを食べながら今日行われる夏祭りに行くことを話すと、先生も楽しみにしていたのか喜んでいた。

\*

で、ここ水連神社で行われる夏祭りに来たはいいけど……

「迷った」

着いてすぐ迷ってしまった。

（やつぱり、いくら近くにいたからって、手を繋がつたのはダメだ  
つたかな……？）

## 方向音痴少女の夏祭り

修くんに電話をして、今いる場所を伝えると、「そこで待つてろ」と言われたので、暫く待つことにした。近くにあつたたこ焼き屋さんでたこ焼きを買って、はふはふしながら食べていると、前を昼間見た人、つまり水色ツンツンさんが通り掛かった。少しなら大丈夫かな、と思い、その後をたこ焼きを食べながらついて行き、焼きそば屋さんに着いた時にやつと追いついて隣に立つた。

いつも並んでみると、ツンツンさんが意外に大きな体をしていることが分かつた。普段見る時はいつも寝ていたし、昼間すれ違った時も帽子があつたからか、正確な身長は分からなかつた……ツンツンさんの身長は、私が百六十六？（一？伸びた）で、頭一つ半くらい差があるから……百八十九くらいだと思つ。

（修くんよりも結構大きい……）

「焼きそば一つ。大盛りで」

「あいよ。仲良く食べろよ？」

「は？俺一人だけど？」

「なに言つてんだい。そんな可愛い子連れておいて  
（可愛い子？一人じゃなかつたのかな？）

そう思い、ツンツンさんの隣を見てたけど、そこには誰もいなかつた。もしかしてこのおじさんは靈的な何かが見えたりする人なのかも知れない、とそんなことを考えながら視線を戻すと、おじさんと目が合つた。

とりあえず頭を下げておく。

「……誰のこと？」

「とほけやがって、ここにいる。さつきから隣にいるだろ？」

「隣？」

そう言つて、私がいの方を見るシンシンさん。

(やつぱつこのおじさんは靈的な物が見えるのかな?)

なんて考へてみると、おじさんが「やつちぢやねえよ」と言つた。

「「ん?」」

私も逆方向を見てみる。そこにはたい焼き屋さんがつて、確かに人はいるけど一人とも男の子だ。女の子はない。焼いているのは女性だけだ。

「あんたら面白いね?」

「?」

「おっさん。俺の隣にいるのは確かに女の子だけど、俺とは無関係の子だよ」

「あの……ちよつといいですか?」

何の話をしているのか分からなかつたので、私は聞いてみることにした。

「ん?なんだい?」

シンシンさんも私の方を見たのが分かつた。

「さつきから、隣にいる人つて言つてますけど……もしかして一人は……靈的な何かが見える人ですか？」

「…………」「…………」「…………」

そう聞くと二人は呆けた顔をして、「ガッハッハッハッハッ！」とおじさんが豪快に笑い声を上げた。ツンツンさんはツンツンさんで、笑っているのか顔を背けて肩を震わせていた。

「ハハハハ！ 嬢ちゃん面白いね！ 分かつてないみたいだが、オレ達が言つてるのは嬢ちゃん、あんたのことだぜ？」

焼きそばを混ぜる 名前分からない 道具で私を示すおじさん。

「…………　はい？」

私がたつぱり間をおいてやつとそういう声を出すと同時に、携帯が鳴つた。

「あ」

そう言えれば待つていろと言っていたのを思い出した。出ると、修くんに、「待つてろ、つって言つたら？」「と、呆れた様な声で言われた。

「あはは……」めん

『はあ……それで？ 今どこにいるんだ？』

『焼きそば屋さん。私がそつち、行こうか？』

『それでも良いが、まっすぐ歩いて来いよ？』

『うん』

通話を切つて、シンシンちゃんとおしゃべり、「それでま」と並んで、私は来た道を真っ直ぐ戻った。

\*

「離すなよ?」

「分かってること

たこ焼き屋さんに戻っている途中で、修くんの方からも来て合流した所で手を繋いでみんなの所に戻った。事情を説明して、母さん柊さん先生に「ひびく怒られた後、華ちゃんといづりちゃんが頭を撫でてくれた。モモちゃんも足にすり寄つて來た。

「次こんなことがあつたら、そん時はマジで切れるからな? 分かつたか? 菊!」

「はい。すいません?」

返事をして、謝りうとした所で少し違和感を覚えた。みんなも同じようにで、首を傾げている。

「ん? どうした?」

「いや……今……なん?」

「なんだよ?」

「…………あ! 名前! 今、名前で呼んだ!」

「つー」

違和感に気が付いて叫びつと、みんなも気が付き、柊さんは何故か赤面

した。

「そうだそうだ。いつも、『お前』とかだったもんな  
「呼んでも名字だったしな」  
「そうだったわね」

修くん、せつちゃん、先生が言つと、柊さんは益々赤くなつた。

(ちよつと可愛いかも)

「べ、別に良いだろうが！」

「姉さん、どこ行くの？」

「どつか！」

そう言つて、歩き出した柊さんを見て、みんなで見合ひと自然と笑みが零れた。モモちゃんを抱いて、後を追つと後ろからみんなも着いてきた。柊さんの隣に並び、顔を見てみるとまだ赤くて、目を合わせてくれなかつたけど、嫌な気分じやなかつた。

それから金魚すくいや射的なんかで遊んで、最後に花火が上がる  
と先生から教えて貰つたから、みんなで見に行くことにした。先生  
について行つて、森に入り、そこを抜けると開けた場所に出た。上  
を見上げると、何の障害物も無く、黒い夜空と煌めく星がハツキリ  
見える。

「きれい……」

「こんな所があつたなんてね」

「ホント、見事なもんだな、これは……」

「偶々歩いてたら見つけたのよ。あなたたい以外、だれにも教えて  
ないわ」

私と母さんと柊さんが感想を言つた、先生がそう言つた。

それから数分経つて、最初の花火が上がり、夜空に花を咲かせた。

「すごい」

「良かつたな。来てみて」

「うん」

花火はどんどん上がり、いくつもの大輪の花を次々と咲かせていく、途中でさつちゃんが、「写真を撮ろう」と言って、ポケットからカメラを取り出した。

(ずっと持つてたのかな?)

そう思いながら、花火をバックに並んで、都合良く丁度いい高さの岩があつたからそこにカメラをタイマー設定して置いてから、さつちゃんも並んだ。と、背後から凄い数の花火の音が聞こえて思わず振り向くと、みんなもつられてしまったのか振り返った。

そこでは、都合十数発の花火が次々と打ち上げられていて、最後に中央で一番大きな花を咲かせた。

暫くみんな、余韻が残つていて空を見上げていたけど華ちゃんが「写真」と言って、みんなハツとなりカメラを見たけど、とっくにシャッターを切っていた。

なんだかおかしくて、笑つてしまい、次いでみんなも笑い出した。

「あ……おかしい。もう一回撮ろうか？」

「ああ。そうだな」

答えた柊さんがもう一度カメラをセッティング、今度はちゃんとみんなカメラを見る。

「ハイ、チーズ！」

さつちゃんの合図に合わせて、みんな思い思いのポーズを取りシヤツターが切られる。

後田、せつじやんに見せて貰つた写真こみ、真ん中に私と修くん  
とモモちゃん。

左側にペースをした曲やなどもありながら歌っていった。

「今度から、何かある時は一いつして残していく」と思つんだ

「あ、いいね！ それ！」

「だから、もうと懸念を増やしていいわ。」

「うん！」

写真を胸に抱えて、私は笑いながら頷いた。

ちなみに、最初に撮った方の写真は、みんな見事に花火を見ていて、大きな花火の方がメインに鳴っていて、また二人で笑った。

(これから先、もっと楽しいことがあるんだな!)

そう思うと、心が弾んだ。

方向音痴少女の夏祭り（後書き）

指摘・批判お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5346z/>

---

方向音痴少女は今日も行く！

2011年12月25日13時49分発行